
マシュマロアイス

Miel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マシユマロアイス

【Nコード】

N7837J

【作者名】

Miel

【あらすじ】

平凡で穏やかな毎日が大好きな短大生の美羽と、どこに居ても何をしても

目立つ冷めた性格のプレイボーイ大学生、柊。

交わるはずの無かった2人の視線。なのになにの間に、君は心の中に住み着いてた。

プロローグ1. プレイボーイの作り方 side 終（前書き）

基本、男性視点でお話は進みます。

フツの女の子が、カッコイイ男の子に愛されるご都合主義が苦手な方はご遠慮ください。

プロローグ1. プレイボーイの作り方 side 柊

香月^{かづき} 柊^{しゅう}はプレイボーイだ。

そんな風にいつも言われる。

ああ、「女ったらし」とか「熟女キラー」なんて言われた事もあったな。

中には「フェロモン撒き散らしヤロウ」って言われた事もあったっけ。

悪友の言葉を思い出し、思わず苦笑する。

好きでこんな風になったわけじゃないんだけどなー。

苦笑ついでに、ため息もこぼしてみる。

そこに、さっき頼んだカプチーノが運ばれてきた。

持ってきたウェイトレスは同一人物のはずなのに、先ほどとは違って香りがキツイ。

どうやら、香水をつけてきたらしい。

こんな、一瓶かぶってきたのか？って位のキツさは、カフェスタツフとしては

あるまじき行為だろ！

心の中で、もう一度ため息をつく。

しかも、やたら動きが遅いしさつきよか制服のスカート、短くね？
これで化粧直しもバツリしてたらほんとアウトだな。

ちよつと確かめてみたくて顔をあげたら、案の定、グロスでテカテカになった

唇が、きれいな弧を描いた。

おいおい！天ぷらでも食ったのかよ！

「ご注文の品は、お揃いですか？」

「ええ・・・」

まさか・・・まさかなー。

ずっと出された伝票は2枚。チラッと覗くと本物の伝票の下には、
ケータイ番号とメールアドレスが書かれていた。

今時この手かよ！

「俺が頼んだのはカップチーノだけだから。伝票は1枚で結構ですよ」

にこりと笑って、2枚目のメモを返す。

びっくりしたような表情。

そうだろうなー。自分に自信があるようなタイプだし。

後はもう無視だ。悪いけど、女には不自由してないし、この香水は嫌いな香りだ。

この女はクビだな。

食べ物を扱う店で、こんだけ匂ってたら旨いもんもまずくなる。

別にミステリーショップパーじゃないけど、このカフェはうちが経営してる店舗の

ひとつだから、オーナーに言っとう。

明日にはもう、彼女はこの店からいなくなっているだろう。

中学あたりから、こんな女が周りに多くなってきた。

モデルの母親の遺伝子を見事に受け継いってしまったため、その辺の女よりもキレイだと言われる。

でも性別は男だから、別にキレイって言われても嬉しくはない。色々困らないから嫌ではないけど。

両親共に長身で、俺自身も20歳で183cmだ。これは親に感謝している。

母の仕事の関係者からモデルになるように勧められる事もしょっちゅうだ。

でもモデルなんて真っ平だ。

先ほどのウェイトレスの香水を思い出す。

初めて付き合った女がしてた香水だ。

中学の時の家庭教師だった。なんてベタな関係！

雑誌の読者モデルをしてるとかで、スタイルも良かったし、化粧は濃かったがキレイな顔立ちをしていた。

でも女の目的はカネだった。これもなんてベタな！！！！

カネがある、扱いやすそうな年下の男だったら、多分どんな男でも

良かった。

受験勉強以外にも、色んな意味でのオベンキョをしてると気付いた両親の行動は早かった。

さっさとクビにし、手切れ金を要求してきた女に、誓約書を書かせ、いくらか手切れ金を渡したらしい。

勿論、その誓約書を元に、センセイが読者モデルをしていたという母の知人の出版社に

圧力をかける事も忘れず、モデルが出来ないようにはなったが。

別にそこまでしなくても、心から好きだったわけじゃない。

でもまあ・・人間には3大欲っていうのがあって。その内の1つが解消できたし、

その行為への興味もあった。

でも、そのつのおかげで女に対する興味と、期待は無くなったけど。

興味と期待は無くなっても、3大欲の1つは無くならないわけで。

そんな時に困らない容姿にしてくれた両親には本当に感謝だ！

たとえば、キレイと言われても嫌じゃないのはこーゆー事だ。

ほら、プレイボーイはこんな風にしてたら自然と出来上がる。

俺は冷めた目で、カウンターの向こうから睨みつけるさっきのウエイトレスを見た。

あーあ。カプチーノがまずくなったじゃないか。

プロログ1. プレイボーイの作り方 s i d e 終 (後書き)

初めての、投稿・・・ドキドキのバクバク。

プロローグ2. 自称、現実的な女 s i d e 美羽（前書き）

ヒロインのココロの一片。

プロローグ2. 自称、現実的な女 side 美羽

「地味」「平凡」

世の中の女の子達の多くは嫌う言葉だと思う。

人に向かって発したら、悪口と受け止められるかもしれない。

でもあたしはこの言葉が大好きだ。

ついでに言えば、「穏やか」も好きな言葉だ。

「地味」で「平凡」に「穏やか」な人生を送るのは、20歳にして、あたしのテーマとなった。

あたし、林 はやし 美羽 みうは、名前こそ平凡ではないものの、容姿はいたって平凡。いや、ちょっとぽっちゃりしてるから、良く言っても中の下だろう。

やたら色が白いため、平凡な容姿は更にぼんやりと人の目に映るらしい。

でもそれは人の印象に残らないんだから良い事だ。

身長だって155cmと、結構な確率で人ごみに埋もれる。ちょっと息苦しいけど

これまた最高だ。

とにかく・・・目立ちたくない。

スポットライトを浴びる人間というのは、もう決められた人間だけなんだ。

なぜそう思うかというところ……昔から、なぜか人の注目される場面では失敗ばかりしてきたから。

劇に出ると本番で台詞を忘れる。卒業式で証書を取りに前に出ると転ぶ。

とある参観日には、たまたま答えがわかって張り切って手を挙げたら見事に

間違っただけで叔母さんに恥ずかしい思いをさせ、クラスメートの親御さんには笑われた。

叔母さん、というのは幼い頃の火事で亡くなった両親の代わりにあたしと兄を

育ててくれた母の妹の事だ。

叔母さんが結婚する事になった時に離れて暮らす事になったけれど、あたしにとっては

本当にお母さんみたいな存在で、今でも色々心配してくれる。

それに……ママのおなかの中で、パパとママの良いところは全て先に生まれてきたお兄ちゃんに取られてしまったみたいだ。

うちの両親は、プロ野球選手と女子アナという、世間が羨むカルダだったらしい。

長男として産まれたお兄ちゃんは、恵まれた体格と運動神経、健康的な肌の色をパパから。

頭の良さと、回転の早さ、社交的なところと小顔にキレイに配置されたそれぞれの

上品な造りの部品をママからもらったようだ。

……叔母の持つ少しの写真と、自分の記憶にうつすら残る面影でしか判断できないけれど……。

あたしは、肌の白さだけはママ譲りみたいだけど、それ位かな？

きつと、お兄ちゃんはママのおなかの中で、肌の色を悩んだ結果、小麦色を選択したらしい。

この話をする、あたしに甘いお兄ちゃんは「そんな事ないよ。美羽は料理が

上手じゃないか」って言う。

これは遺伝じゃない。慣れだ。

夏美叔母さんも仕事をしていたし、料理は中学くらいからほぼ毎日作るようになっていた。

出来すぎた兄を持ち、何かある度に失敗するどんくさいあたしは、人前に立つ事が大の苦手になり、誰の目にも映らない地味な存在でいることがごく落ち着くようになった。

短大に合格したと同時に、結婚して3年になる夏美叔母さんのご主人の転勤が決まった。

そして、ずっと一緒だったお兄ちゃんも仕事で海外に行く事になり、1人で暮らす事になった。

1人になってもあたしの毎日は変わらない。

良い意味でも悪い意味でも目立たず、地味に穏やかに生きるのだ。

あたしは自分を、すごく現実的な女だと思う。

第1章1. 悪友の企み

第2と第4水曜日にはサークル活動がある。

活動っていつでも、仲の良い先輩が作ったサークル「C I N E M A C A F E」は

読んで字の如く。映画を見てお茶しようってお気楽なサークルだ。立ち上げた先輩が、この大学の理事長の息子だったから、サークル棟の1番広い

部屋をG e t し、ホームシアターまで導入した。

専用の部屋があるんだから毎日だって出来るんだが、毎日映画見るほど

メンバーもそんなに暇じゃない。
なのに・・・

「今年度からは水曜、毎週やる事にする」

今日は適当に選んだ映画が思った以上に面白くなって、早めに切り上げて

部室内でコーヒーを飲んでた時だった。

「他の日にも、親睦会とかさ、合宿やろうぜ」

俺じゃない。これは部長でもある悪友、さいが けいすけ斎賀啓介の言葉だ。

サークルを立ち上げた先輩は、時々は来るが4回生になったので、後輩にこの

サークルをまかせる事にしたのだ。

最初は俺に部長の話が来たんだが、面倒だったからなんだかんだ面

倒見のいいコイツを推した。

コイツが意外とマメで面倒見が良いのは先輩も知ってたから、あまり反対も

されず、コイツに決まったんだが……

だからってなんでいきなりそうなる!?

「なんだよ、突然。大体、親睦会って言っても、オマエ今年新入生いらねえって

入れてないから、去年とメンバー変わってねーじゃん」

メンバーは、部室の鍵を預かってるコイツと、副部長の俺。

あとはコイツと同じ、幼稚舎からずっと同じクラスの腐れ縁のヤロ
ーが3人と

そいつらの彼女3人の全部で8人だ。

特に勧誘しなくても、希望者は沢山いた。が、大所帯は何かと面倒だし、結局は

気心知れたメンバーと集まれる場所が欲しかったというのが発足の理由だからなあ。

結局は全員断った。

広い部室に今年は8人。まだまだ入れるのに、新規勧誘はしない。
入れないとコイツは言い張った。

ここに居る皆が、不思議そうな顔をして啓介を見てる。

何を考えてる?

悪友の顔をじーっと見て怪しんできると、

「ああ。大事な事を言ってなかった。短期学部にも、同じようなサークルあるんだけどさ。」

基本、合同じゃん？でもウチらが短大と一緒に断ってたから、アツチ、部室無いんだよね。
だから今年から短大の子が合流する」

「はぁ!？」

同じキャンパス内に、短期学部もある。

が、知名度、偏差値ともに大学部と短期学部は大きく違う。
しかも短期学部は殆ど女だ。男は、確か2割位しかない。
短期学部の女は、大学部の金持ちの男を狙ってる子が多い。だから
合同は何かと
面倒が増えるからと、これもまた断ってきたのだ。

「言っとくけど、これはもう決定事項。部長は誰？」

「・・・オマエ」

「啓ちゃん」

他のメンバーは、面白そうにニヤニヤしてる。
啓介の中で一体何があった!？

「おい!なんだよ。いきなり。」

小突いて小さな声で聞くと、啓介は「後でな」とニヤリと笑った。

「じゃあ、明後日親睦会すつから。来れないやつはいる？」

「明後日？金曜じゃん」

「そ。水曜の活動日以外にも、親睦会とか・・・って言ったろ？」

おかしい！なんでこんなにサークル活動に積極的になる？
このサークルには、俺に引きずられて入ったようなモンなのに・・・。

「皆オツケーだな？じゃあ、いつもと同じ時間にココな。はい、解散」

片付けをして、皆が出て行った後、ようやく啓介が口を開いた。

「向こうの部長、めっちゃタイプなんだよね♪」

オマエの恋愛ごっこに俺を巻き込むなよ！！！！！！

第1章1. 悪友の企み（後書き）

こんな優雅な学生生活がしたかったです。

第1章2. 第一印象

「で？親睦会とか言ってた当の本人はドコ行った？」

短期学部の子達が合流する事になったため、急遽行う事になった親睦会だが、

メンバーを増やす事も、親睦会の事も、部長の権限でゴリ押しした部長である

啓介がいない。

「啓ちゃんなら、短期学部の校舎に迎えに行ってたわ」

サークルのメンバーの1人、建人けんとの彼女である、那智なちが面白い事になりそうだ。といわんばかりの笑顔で言う。

「・・・オマエなあ、面白がってるだろ」

「あたしだけじゃないわよ。全員ね。あー、アンタは嫌そうね。啓介の変わりようがさ、原因が何かなあってね。楽しみじゃない」

「ああ・・・。向こうの部長がタイプらしい」

「へえ！！益々楽しみ♪」

あゝ俺は楽しみじゃねえ！ここは癒しの空間だったのに・・・。一体どんな

ヤツらに、この空間を壊されるのか・・・。

その時、廊下から啓介のやけに明るい声が聞こえてきた。

「輝美ちゃん、コッチだよ。サークル棟で一番広い部屋なんだ。
設備も色々揃ってるから、過ごしやすいと思うよ」

どうやら、啓介の思い人は「てるみ」というらしい。

「じゃあ、皆を紹介するからね」

部屋のドアが開けられた。

「お邪魔します」

ん??? ふたり?

たった、2人?

しかも、2人ともやけに化粧気がなく、予想外だった。

そうだ、俺の予想では、きゃーきゃー煩い、あほっぽい軽い派手な、
いかにも

「ジョシダイセー」な感じの子達がわんさか来るんだと思ってた。

一気に気が抜ける。

「あら? 短期学部映画サークルって、2人だけなの?」

「うん、まーそういうこと」

那智の質問に、啓介が答える。

「少人数だし、馴染みやすいだろ。もっと早く馴染むには～～紹介しなきゃな！」

コイツ・・・この張り切りようは・・・。

どっちだろう。啓介の思い人「てるみちゃん」は。

1人は・・・身長163cmくらいか？少し襟足の長い栗色のショートヘアだ。

化粧は薄いが、目鼻立ちがはっきりした、爽やかな感じのボーイッシュな美人だ。

うん、コッチだな。

悪いけど、もう1人は・・・白くて丸くて小さい。顔立ちも、目は二重だけど大きくもない。

鼻も口もこじんまりしてて・・・なんというか・・・うん。とにかく白くて

丸くて小さい。

ぬいぐるみのウサギみたいだ。

そう考えてる間、啓介は皆を紹介していた。

「左から、体格のいい短髪が建人で、170のデカ女が那智。建人の彼女。

で、眼鏡が智也ともやで、ガイジンみたいな顔が沙羅サラ。智也の彼女ね。あ、日本語大丈夫だよ。ハーフなんだ。

で、一重の鋭い目してる黒髪ストレートあずまが東で、これまた黒髪ストレートが

東の彼女の舞まい。

で、黒髪のパでやけにキレーな顔してるのが柊しゅう。ここの副部長。

で、俺が部長の斎賀啓介。智也と眼鏡キャラかぶってるけど、俺は色素薄いから
眼も髪も茶色。

ウチはこんな感じかな？」

と、一気に8人を覚えなければならぬ2人に、外見の特徴を言い
つつ分かりやすく
紹介する。

「あたしは二宮輝美です。皆にはてるちゃんって呼ばれてます。皆
さん先輩ですよ？」

てるちゃんって呼んでください」

やっぱり。ボーイッシュな方がハキハキと自己紹介する。

皆口々に「よろしくー」なんて言ってる。

「林美羽です。名字から“りん”って呼ばれます」

それだけ言ってウサギはぺこりと頭を下げた。

なぜか女性陣に囲まれ、「りんちゃんよろしくねー!」と、なでたり抱きしめられたり
している。

あー何かに似てるなー。なんだっけ。

「やーん! ふにふにしてる〜♪」と、那智が彼女のほっぺたをむ
にむに触りだした。

いきなりの親しげなスキンシップに、彼女は固まってしまっている。

「色白いし、マシユマロみたい〜!」

ああ、そうだ! マシユマロだ。

第1章3. 一ヶ月

短期大学の子達2人が合流して、もうすぐ1ヶ月になる。

物怖じしない性格の二宮は、すぐに打ち解けたし、林は・・・少し戸惑っていたよう

だったけど、小さいものの好きの那智にあっという間に皆の真ん中に引きずっていかれ、

それ以来、いつのまにか輪の中心にいる。そんな感じになっていた。

2人とも、軽い感じではなく、これだけ揃ってるイケメン（自分で言うなって？

でも周りの評価なんだから仕方ない）に、媚びるようなところは見せなかった。

那智たち3人以外では、どちらかというと「女」の嫌な面をずっと見てきた

俺としては、これは嬉しい誤算だった。

いや、嬉しいというか・・・とにかくほっとした。

大学の中でも、かなりの気に入りの場所であるこの部屋の居心地が悪くなったのでは

たまったものではないからだ。

ただ・・・

「さ。じゃあ。今日は何見る？」

二宮の隣を陣取って、啓介が明るい声を出す。

これが問題だ。

別に、何を見るかが問題なんじゃない。好みのジャンルはあるけど、別にホラーが
苦手だとか、外国のコメディ映画は解せない。とかそんなのは無い。
座る場所が問題だ。

比較的豪華な設備が備えられているこの部屋は、大型のスクリーン
を半円で囲むように
2～3人がけのソファがいくつか置かれている。

恋人同士である3組は、勿論それぞれ一緒に座るが、遺された俺と
啓介は今まで
1人でひとつのソファを悠々と使っていた。

それが今では・・・二宮が目的で2人をこのサークルに引きずり込
んだ啓介は、
最初林と一緒に座ろうとしていた二宮と、「柊とじゃ、ソファが狭
い！」と

文句を言い、男女のペアで座るよう言い出したのだ。
勿論、『部長命令』だ。

そうなると必然的に俺の隣には・・・林だ。

まあ、啓介がそう言い出すのは予想してたから、やっぱりな。とい
う感じで、
小さくため息をついた。
すると・・・

「すみません」
申し訳なさそうに、隣にいる林が謝ってきた。少し強張った表情を

している。

あ、ため息、聞こえたかな・・・。

「いや、そーゆー意味じゃなくて」

すると、不思議そうに俺の目を見てくる。

そういえば、コイツとまともに目を合わせたのは初めてかもしれない。

丸い目で、じっと見てる。

なんだか、少し落ち着かない気分になってきた。
とにかく、ちゃんと説明しなきゃ。

「あ・・啓介が、二宮狙いだって分かるからさ。そう言い出すだろうなって

思ってたんだよ。だから、林がここ座るだろうなって、思ってたんだ。

実際そうだったから、単純な啓介が可笑しかっただけ」

「そうですか。」

納得したのか、林は俺からずっと視線をはずした。

なんだか・・少し寂しい気がした。

なぜか分からないけれど、さっき少し嫌な思いをさせただろう、そんな空気も

変えたい、そしてもう一度丸い目をこっちに向けさせたいような、そんな感覚になった。

周りは何を見ようか少し騒がしい位に盛り上がってる中、林の沈黙

が苦しくて

なんでも良いから話して欲しいと、気がついたら林に問いかけていた。

「サークル・・・2人でって珍しいね」

「えっ？」

丸い目が、もう一度こちらを向く。

自分の方にまた意識を向けてくれた事に、なぜだか少し満足を覚える。

林は、皆の輪の中にいても、どこか一線を引いてるというか、そんなところがあった。

何かと自分をアピールしてくるような女ばかり見てきた俺には、初めて見るタイプの女だった。

二宮も、決して媚びたり自分に注目させる為にわざと大きな声で語尾をのばして

話すとか、そんな事をするタイプではなかったが、それでも自分の主張ははっきりし、

良い意味で印象に残る女性だった。

「サークルは・・・入ってなかったです」

林って、なんでちょっと引いた感じを受けるんだろう？

その事が急に気になって、考えていたところに、これまた意外な答えが返ってきた。

「え？ 啓介が、短大側のサークルと合併するって話だったんだけど

「？」

「・・・いえ。輝ちゃんがよくレディースデーの水曜日に映画に行ってたんです。」

啓介先輩が、それを知って誘ったんだと思います」

「あー・・・そうなんだ」

ここでも啓介にやられた！

こんな理由でもつけない限り、きっと大学側でも入会希望が出ただろうしな。

でもこれで2人だけがここにやって来た理由がわかった。

「林は？」

「え？」

「二宮は水曜日によく映画に行ってたんだろう？それは分かっただけど、林は？」

なんでここに来る羽目に？あんま、来たかったって感じにも見えなかったけど？」

「・・・・・・わ、私は・・・」

戸惑いながら林が口を開いた時、

「よしっ、決まった。じゃ、建人、カーテン閉めてくれよ」

啓介の言葉で、会話が途切れた。

どこか、ほっとしたように見える林。

そうだ・・コイツ、全然自分の話をしないんだ。

ふとそこに気付いてしまった俺は、実は結構前からコイツが気にな
っていたのかも
しれない。

でも、この時はそんな事までは気付けなかった。

ただ、だから一線引いた感じに見えんのかなあって、それだけだっ
た。

林が隣に座って映画を見て、その後お茶しながら皆と雑談するよう
になって1ヶ月。

林が隣に居る事が、嫌というよりむしろ『じっくり』してる事は、
大した問題じゃ
ないと思ってた

第1章3. 一ヶ月（後書き）

マシユマロ、侵略開始。

第1章4. イライラ

「もしもし?」

考え事をしている時に鳴った電話に、思わず誰からか確認せずに出てしまった。

「わたし」

「・・・まどか。連絡はこっちからすつから、かけんなっただろ・・・」

大学に入ってから関係をもった女で、野心があって年よりも大人びた美女なだけ

パーティーなど、『色々と』便利で、関係をそのまま続けていたらすっかり自分の事を彼女だと思っている。

俺は付き合っているつもりはないんだけど・・・。

でもまあ、面倒だから放っておいたが、今はなんだか妙にイライラした。

「だあって、終全然連絡くれないじゃない。付き合って2年以上になるけど、こんなに会わないの初めてよ?」

「そうだったか?」 答えながら、心の中で「付き合っていないだろ!」

と反論する。

「1ヶ月よ！3年生ってそんなに忙しかったかしら？私はそうでもないけど？」

「1ヶ月も会ってなかったっけ？」

自分でもびっくりだった。別に会いたいても、女が必要だとも思わなかった。

だから連絡もしなかったし、存在すら忘れてしまっていた。
でもまあ・・・怒らせない方がいいだろうな・・・。

これ以上彼女ヅラされるのはたまらないが、ここは機嫌をとっておこう。

最近海外の某ガイド誌で有名になったイタリアンのお店に予約を取る。

普通なら2ヶ月待ちらしいが、VIP用に大体数テーブルは空いてるものだ。

こんな待遇が好物のまどかだ。すぐに機嫌は良くなるだろう。

2分後、予約も取れたところで、ふと林はイタリアン好きかな・・・なんて

考えていた。

まどかの存在をすっかり忘れていたのも、林が自分の前に現れてからだ。

でも、そんな事はこの時には全然思いつかなかった。

俺の中では、女は自分の話をしたがるイキモノだった。

これが好き、あれ嫌い。これ欲しい。聞いてもないのに、自分の

好みから

最近お気に入り美容院の話。親に買って貰った時計の自慢。

挙句の果てに、自身でも会った事のない有名人の遠い親戚の話まで何でも喋る。

心の中では「オマエ・・・会った事もないのに『おじさま』って」・・・とツツコミを

入れつつ、「へえ。すごいね」と微笑む。これでOK。

なのに

林は全然自分の話をしない。

まどかはイタリアンが好きだ。林は？

まどかは、俺の車の中でもポルシェを気に入ってる。林は？

まどかの好きなブランドはヴィトンだ。林は？

何も知らないな・・・ああ。次に会えるのは水曜日か。あと3日もある。

夜、まどかと待ち合わせして店に行った。

今大評判の店に、当日予約で来れた事ですっかり機嫌が良くなっている。

でも考え事をしてて、うっかりBMWで向かった事には少し拗ねたみたいだ。

何でもいいだろ！目的地には着いたんだから！
ちよつとの事でまたイラつく。

今まで、こんな小さな事ですぐイラついたかな？

美味しいはずの食事が、なんだか味気ない。

こっそりため息をついたところで、携帯に啓介からメールが入った。

「今、りんちゃん家で飲み会。オマエ、来れる？」

はあ！?!?!? 林の家で！?!?!?

「・・・ちよつとごめん。電話してくる」

席を離れて電話してみれば、なんでも那智と建人も居るらしい。

「りんちゃんの料理、めっちゃめっちゃうまくてさあ！」

ああイライラする。

俺の方は予約待ち2ヶ月のイタリアンだぞ！?!? こっちの方がうまい・
・はずだ。

きつと、今日味気ないのは、『たまたま』だ！

「ねえ、何だったの？」

席に戻るとまどかの機嫌がまた少し悪くなっていた。

チツ。せつかくの努力が無駄かよ・・・。

「啓介だよ」

「だから、何だったの？」

俺のプライベートだ！なんでそんなに気になる？ああ。イライラする。

答えなかった事で、また少し機嫌が悪くなったまどかは、サークルの話をしてきた。

「短大の子が入ったんでしょ？ならあたしも入れてよ！ずるいじゃない。」

ああ、イライラする。

第1章5. 誤解と心の距離

心地よい暖かさから、日中には少し汗ばむようになった5月も終わりのある日。

3人掛けソファの端に、隣の俺に触れないようちんまりと座る林の存在に

すっかり慣れ、居心地の良ささえ感じるようになってしまった俺は那智の言う「りんちゃんって癒される！」って、これの事か・・・と感じ始めていた。

林は多分聞き上手なんだ。見た目からのイメージよりも少し落ち着いた声色で

ゆっくりと話す林が相手だと、俺もつつい話しすぎてしまうところがあった。

相変わらず自分の話はしないけれど・・・それでも段々林の事を知っていた。

兄貴と2人暮らししてたが、兄貴が仕事で海外に行ったため、今はそのマンションで
1人で暮らしている事。

ずっと自炊だったから料理が得意になり、それが目当てで二宮や啓介、それに

他のメンバーまでよく林のマンションで飲み会をしてる事。

それと・・・

それと・・・

・・・って、それ位じゃねえか！

林の家での飲み会も、最近やっと俺も参加してみた。

あまり人に興味を示さない東や、サラまでもが2～3回行ってるっていうんだから

かなり疎外感を感じる。

そんな俺にサラは「柊は・・・行きたいって言わなかったから」

え？そんな問題？

確かに、林に対する興味を表面に出さないようにしてきた。

だってそんなの慣れてない。女に興味を覚えるなんて。しかも外見じゃなく、

中身だ。

林は隣に座っていても、あまり俺を見ない。一度、振り向くかなー
と思っ

ずっと林の横顔を見てたけど、全っつ然気付かなかった。

東に「怖いくらいりんちゃんの事見てたな」って苦笑されたくらいだ。

東が気付くほどの事を気付けない林は、どうかしてる！

今日は何か新しい事を聞きだしてやる。

そんな決意(?)も新たに、意気込んで部室に向かったら、既にサラと林が居た。

あれ？啓介がもう鍵開けてたかな・・・ドアを開けて声をかけようとしたその時・・・

林がサラからカネを受け取っているのが見えた。

「いつでもいいからね」サラが優しく林に言う。

それまでも、楽しい気分が一気に吹っ飛んだ。

林だけは他の女と違うと思った。色目を使っても来ないし、化粧気もない。

服だってブランドものじゃないし、なによりそう信じたかったんだ。沢山自己中な女を見てきたくせに、まだそんな幻想を抱いていたのか、俺は!?

勝手に林に対して良い感情を持っただけなのに、ひどく裏切られた気がした。

乱暴に部屋に入る。中にいた2人は、俺の勢いにびっくりしたようだった。

「オマエには失望した。もうここに来んな。出てけ!」

一方的に怒鳴って、呆然とする林を部屋から追い出した。

心の中が、痛くて、悲しくて、もどかしくて、自分の行動が止められなかった。

多分、俺は今すごい顔をしてるんだと思う。

サラも目の前でオロオロするばかりだった。

すぐに智也がやって来た。

「りんちゃんが・・・ひどく落ち込んだ様子でサークル棟出てったけど?・・・」

「あいつ!サラからカネ受け取ってた!!!!」

林の名前が出ただけで、また心を悲鳴をあげたような絶望感に襲われた。

「・・・・・・・・だろうな。」

「・・・え?智也、お前知ってたのか?」

「来週のイベントの費用だろ」

・・・・・・・・

「・・・え?」

「来週、また部長命令で啓介がバーベキューやりたいって言ったじゃん。その為の費用だよ。」

俺ら、なんだかんだ忙しいじゃん。だからりんちゃんに色々頼んだんだよ」

やばい！俺、なんかすげー勘違いを……。心臓がドクドクいつてる。

「俺・・サラがあいつに金貸したんだと・・」

「はあ！？」

「っ！わ、私、そんな事してない！」

「おまえ、いつでもいいよって言ってたじゃん！」

「今日すぐ準備に取り掛かるっていうから、時間ある時でいいよって意味で・・」

「柊・・りんちゃんは、そんな子じゃ、ないだろう？」

諭すように話す智也に、なんだか恥ずかしくなってきた。どうしよう、俺、林を追いつ出した。

そうだ、追いかけなきゃ・・

「探してくる・・」

「んー。多分、ちゃんとここに帰ってくると思うよ。ガムシヤラに探してもすれ違うのがオチだろ」

智也は冷静にそう言うと、サラに飲み物を頼んだ。

2時間後、俺の勘違いで林を追い出してしまった事を怒ったメンバーの冷たい視線にも
もういい加減いたたまれなくなってきた頃・

コンコン、と控えめなノックが聞こえた。

二宮が急いでドアを開け、ちんまりと立ってる林を確認すると「りんー！」と叫び、

部屋はまたもや大騒ぎとなった。

意外と、林は落ち着いていた。少しだけ、部屋に入るのは渋っていたが、俺が

目の前に立って「誤解してた。ごめん・悪かったよ」と言ったら中に入ってきた。

いつのもソファの定位置に落ち着いてからも、やっぱりいつもより距離を感じた。

「あのさ・・・本当、ごめん」

「・・・ハイ」

会話が止まってしまうと、見かねた那智に「2人でちゃんと話した方がいい」と、

他のメンバーは先に帰ってしまった。

「あのさ・・・本当、カーッときて。ごめん。ひどい事した・・」

「あの、本当に・・いいんです。そう思われる何かが、あたしにもきつとあったんだと思うし」

顔をゆがめて、無理に笑顔を作ろうとする。

まただ。また心臓がぎゅゅゅと押しつぶされそうになる。

「違うよ。勝手な、思い込みだ。あんま・・・女の子を信用できないところがあったから・・・」

「でも、誤解だったってわかってくれたんでしょ？なら、いいです」

「そんな簡単に！俺が全面的に悪いのに・・・もっとうして欲しい、とかさ。無いの？直すようにするよ」

「うーん・・・そりゃ悲しかったけど、誤解だったんだし・・・女の子信用できないって、

きつと昔何かあったんですよね。なら、仕方ないです。

それをどうこうして欲しいとか、それを言う権利あたしにはありませんから」

拒絶された気がした。

鋭い何かで、深く、深く心をえぐられた気がした。

要求が多い女は苦手だったハズなのに。そのままを受け入れられる事をひどく

拒絶と感じたんだ。

いや、そのままを受け入れられたんじゃない。

俺がどうあっても、自分には関係ない。そう、言われたんだ。

俺も、それが楽だったはずだ。女にはいつもそれを望んで、出来ない女は切ってきたじゃないか。

なのに・・・林に言われた言葉は、ひどくショックだった。

第1章5. 誤解と心の距離（後書き）

美羽の心の扉はかなり頑丈？

第1章6. 罨

林が気になって仕方ない。

俺の一方的な思い込みで彼女を傷つけ、誤解は解けたものの、それ以来ギクシャクしているような感じがする。

以前の俺だったら、自分が悪い事に関しては謝罪するが、それで相手の態度が

硬化したところで、そんなの別に気にしなかった。

それはそれで構わない。自分がどう思われているのか、なんて関係なかった。

相変わらず、水曜日には俺の隣に（でも出来る限りソファの端に寄って）

ちょこんと座ってる林。

話しかければ答えるし、ちゃんと目を見て接してくれる。

でもそれじゃなんだか足りなくて。ここんとこずっともどかしい思いを抱えていた。

あまり自分の事を話さない彼女だったが、それでも観察していると少しずつ彼女の事が

分かってきて、それが嬉しかった。

人の話を聞く時、目をじっと見て口をきゅっと引き締めて聞く事。笑うと鼻にちよつとシワが出来る位、結構豪快な笑顔になる事。

手が小さくて、大きめのコップを片手で持てない事。

爪は短く切られていて、ネイルはあまりしない事。

考え事をする時、映画を見てる時、よく口元を触る事。

ひとつひとつの発見が、嬉しくて、満面の笑みを見た時にはこっちまでつられて笑っちゃうくらいだった。

「柊、変わったな」

週明けの月曜日、構内のカフェテリアでランチ中、東が話しかけてきた。

「え？何が？」

「よく笑うようになったし、表情が豊かになったよ」

何言ってるんだ？前から変わんねーじゃん。多分、それが顔に出てたんだろう。

「前はさ、なんか斜に構えてたっていうか・・そんな感じだった。昔あった事とか、引きずってんのかなって気にしてたけど、今のお前が見れてすげー嬉しいよ。きっかけはりんちゃんだろ？」

「・・・な、何言ってる・・・」

「自覚、ないの？りんちゃんの事見てる目とか、りんちゃんの話で笑う時、全然違う。」

「・・・」

「オマエ、りんちゃんが好きなんじゃん」

啓介にトドメをさされた。

なんか、もどかしいのが一気にスカーーーっとした感じだ。

そうか・・・俺、林が・・・うん。美羽が好きなんだ。

だからあの時誤解した時、悲しくて痛かったんだ。そんな女じゃないって

思ってたから。いや、実際そんな女じゃなかったんだけど。

なら話は早い。

まず、あっちから片付けないと。

まどかは、なんとなく男は俺だけじゃないって確信があった。

最近殆ど会ってないが、以前のように拗ねたりしなくなったし、簡単に別れられるだろう。

「ワリ、俺、先行くから」

急いで席を立った俺を、悪友・・・もとい、親友達は、生暖かい目で見送ってたけど

全然気付かなかった。

気付いてたらきつと、むずがゆくなって小突いてたと思う。

次の日の火曜日、別れを切り出した俺に、まどかは小さくため息をつきつつ、それでも

簡単に了承してくれた。

やっぱり他にも男は居たし、自分を一番に扱ってくれるその男の方が良いらしい。

よし、これで後は美羽を自分のモノにするだけだ！

と、思っていたら・・・

「ひとつだけ、条件があるの」まどかが切り出した。

「うちの取引先の大事なパーティーがあるのよ。父の代理で私が行かなきゃならないの。」

でも、彼は都合が悪くて・・・それに付き合ってくれたら、キレイに別れてあげる」

勿論、その申し出に飛びついた。

「分かった。いつだ？」

「明日の夜。お昼で大学は切り上げて、一緒に香港まで飛んでちようだい」

「は？香港？」

「そうよ、取引先は香港の会社なの」

しかも明日！明日は水曜日で、週に1回美羽に会える日なのに・・・。

少し考えていると、

「あたしとは、明日が最後よ。彼女とはまた毎週、会えるじゃない」

美羽の事は話した事が無かったのに、なんで・・・

「柊を見てたら、分かるわよ。最後だから、付き合って。ね？」

「あ・・・ああ。分かった」

翌日の約束をして、すぐにまどかとは別れたが、水曜日の夜に香港となると

帰りは木曜だ。

金曜提出のレポートを今晚中に仕上げておかないと・・・

レポートの量と思い出して、げんなりしたけれど、これも美羽とちやんと向き合うため！と

思いなおして、徹夜覚悟でレポートに取り掛かった。

明日の午前は、そんなに重要な講義は入っていないから、明日は大学に行かず、

このレポートを仕上げてしまおう。

レポートに取り掛かろうとしたところで、携帯に着信が入る。

啓介だ。

「柊！ずっと携帯切ってたな」

ああ、そうだった。まどかに別れ話をするのに、邪魔が入って欲しくなくて

携帯を切ってさっきまでそのままだった。

「ああ。悪い。急ぎか？今、それどころじゃないんだ」

とにかくこのレポートをどうにかしないと・・・。

「明日のサークル・・・」

「だから！それどころじゃないって。」

キレイな体で美羽に向き合うために、明日のサークルは棒に振らなきゃならないんだよ！

「まどかちゃんから、聞いたのか？」

「ああ、聞いたよ。でも今それどころじゃねーんだって！明日も行かねーから。」

悪いけど、急いでるから。じゃあな」

一方的に電話を切る。

もう頭の中は、この数日うまく乗り切って美羽に会う事だけだった。

そして、今香港に居るわけだけど・・・なんだ？話に聞いてたのとは雰囲気の違い

『パーティー』だった。

ていうか・・・単なるお食事会だ、これじゃ。どういう事だ？

でも、これが終わったらまどかとは終わり。

早く日本に帰りたい。美羽に、会いたい。

腕に絡まってるキレイにネイルアートを施してあるまどかの手を見て、無性に

美羽に会いたくなった。

帰国して、すぐに啓介に連絡を取った。

香港から翌日すぐに帰るつもりが、なんだかんだと滞在を伸ばされて、結局土曜日になった。

まどかの言う『パーティー』が金曜もあったからだ。

だが、それも規模の小さなものだった。

まったく、早めに出来たレポートを香港に発つ前、大学に寄って提出しといて良かった・・・。

本当はすぐに美羽に連絡がしたかったが、美羽の携帯番号もメールアドレスも知らなかった。

まったく。どれだけ関係が薄いかを思い知らされる。

美羽は俺の連絡先を知らなくても、何とも思わないんだな・・・少しの寂しさを

感じて、啓介に連絡を取ったのだった。

「もしもし？ 柊！ オマエ、どこ行ってたんだよ！」

「香港。わり、急いでて、携帯の充電器忘れててさ。で、啓介、美羽・・・いや、

林の携帯番号教えて」

「は？ オマエ、何言ってるの？」

「だから、林の・・・」

「いないよ。」

俺の言葉にかぶせるように、啓介が吐き捨てた。

「りんちゃん、学校・・・辞めた」

目の前が、真っ暗になった。

第1章7. 運命の人なら

それからもう、どうやって啓介のところに行ったのか、よく覚えていない。

でもまどかは何か知っている。そんな確信があった。

まどかには美羽の話をしていない。なのに、香港行きの話が出た時、美羽の存在を匂わせた。

それに、啓介がその日の夜に電話してきた時にもまどかの名前が出ていた。

啓介のところに向かう途中、まどかに電話をする。

そしてその疑念は、すんなり解消する。

「知ってたわよ。斎賀さん達が話してるの、聞いたの。最近特にそっけなく

なってきたから、そろそろ別れ話が出るだろうなって思ったわ。

だから、斎賀さんに『夜、柊に会うから送別会の事、伝えておくわ』って言ったのよ。

キレイに別れてあげるっていうのは本当。

あたしを1番に見ない男なんて嫌。でもね、あたしにもプライドはあるの。

だから少しでも邪魔させてもらったわ。

でもほんの少しよ。運命なら、また会えるはずだわ。それが信じられないなら

自分で引き寄せなさいよ」

一方的に電話は切れた。

そうか、あの時の「まどかから聞いたか？」っていう啓介の話は美羽の事だったんだ・・・。

勝手にまどかの香港行きの話だと勘違いした。

あの時啓介の話をちゃんと聞いてたら・・・
まどかの香港での行動に疑問を持っていたら・・・
せめて、携帯が使える状態であったなら・・・

そうしたなら、少しは状況が変わったのだろうか？

今まで後悔なんてした事がない俺なのに。

美羽は、俺を待っていてくれると思っていた。いや、思い込んでいた。

確証なんてなかったのに。

そうであって欲しかったし、人に拒絶される事に慣れてないから、今回もまどかとの

関係を切りさえすれば、美羽と向き合えると思ったんだ。

なのに・・・

美羽は、いつも俺の想像を簡単に裏切る。

自分がきちんと受け入れられてるか、不安に感じたり、彼女が居心地悪い思いを

してないか心配したり、

水曜日が待ち遠しく感じたり、笑顔を見れた時には頬が緩んだり。
もっと美羽の事が知りたいと求めたり。

今まで知らなかったような感情がどんどん湧いてきてた。

正直、人と真正面から向き合うなんて苦手だった。
それを、これからって時に、美羽が消えた。

もう、ワケが分からなかった。

なんでだ？なんでこんなに空回りばかりする？

啓介のマンションには、二宮も居た。

「あ。柊・・・」

「・・・美羽の事、教えて。・・・頼む」

まどかの事で、誤解があった事をすばやく伝えた。
今はとにかく、早く美羽の情報が知りたい。

その気迫に押されてか、二宮が事情を話し出した。

「りんのお兄さん、今お仕事で海外に居るでしょう？そのお兄さんが事故に遭ったって

現地の関係者から電話があって・・・

りんはご両親が居なくてお兄さんだけだから、すごく取り乱して・・・

。命に別状は無いみたいなの。でも大きな事故で、りんが呼ばれたのよ」

「それで学校も？」

「私も、よく分からないのに退学は早いんじゃないかって言ったんだけど、ちゃんと元気になるまでは側にいたいって。たった2人の家族だから・・・」

「連絡先は？」

「わかんないわ。とりあえずお兄さんの容態が分からなきゃ。りんから連絡がくるところわ」

「携帯、持ってたんだろう？」

「りんの携帯、海外では使えないのよ・・・。りんだって、まさかこんなことになるなんて思ってたでしようし・・・。」

「だから、あたしと啓介の連絡先を渡してあるの。どっちかに連絡があると思うわ」

「・・・俺のは」

「なんで啓介の連絡先渡してんだよ！」

「・・・オマエに電話した時、簡単にだけど送別会やろうぜって話になって、それで」

電話したんだよ。

まあ、結果的には誤解だったんだけど、まどかから退学の話聞いた上で

『行かない』って答えだったんだと、俺たちもそう思って・・・。」

なんで美羽の事はこんなにうまくいかない！？なんで単純なものまで複雑に絡まるんだ・・・。

「あいつが・・・好きなんだ。やっと、気付いた。まどかと香港行ったのは・・・別れるためだ。」

帰国したらいつでも・・・いつでも美羽と会えると思ってた・・・」

一番会いたい人間が、もうここに居ない。

生まれて初めて、求めた相手が、気持ちも伝える前にすり抜けてしまった。

「終・・・」

「・・・期間は？」

「わ、わかんないわ。だって学校まで辞めちゃったもの。でもまた戻ってくるわ。」

お家はそのままよ。あそこが帰る場所だもの。

留守中の郵便の受け取りとか、頼まれたから時々部屋の様子を見に

行くし。

帰ってくるから。

いつになるか・・わからないけど・・・」

二宮の声が段々小さくなる。最後には殆ど聞こえなくなっていた。

運命の人なら、本当にまた会えるか？

俺に、それを引き寄せる力が？

初めて、自分が小さな存在だと知った――
――。――

第1章 8. 色褪せた世界

美羽が俺の目の前から消えて、もう3週間になる。

6月も終わりに近づき、今年は例年よりも早く梅雨明けし、周りの景色は緑は青く、花々は色鮮やかに咲き誇っている。

様々な色に溢れた景色のはずなのに。

俺の世界からは色がなくなったような、そんな感じだった。

何も変わらない毎日。それが以前はそこそこ楽しめたはずだった。

サークルでは3人掛けのソファに1人ゆったり座り、適当に悪友や女の子と遊ぶ。

パーティーを開いたり、家の仕事にも興味を持ち始めていたから美羽がいなくてもそれなりに充実していたのに。

会ってたった2ヶ月ちよつとの美羽が、いつの間にか俺の世界の真ん中に居座っていた。

今では、隣に誰も座る人が居ないのに、美羽が座れる空間を空けて座ってしまって仲間からは、からかうというより心配そうな目を向けられる。

俺が恋に堕ちたなんて、今までの俺の言動からして絶対からかわれるんだと思ってた。

でも、人に本気になれない俺を皆心配してたんだって言う。

その言葉に、なんだかくすぐったいような、暖かいような気持ちになった。

今はこいつらに救われてる気がする。

最近、2～3日ごとに美羽の家を訪れている。

二宮が頼まれた、郵便や宅配、その他諸々の整理って役割を頼み込んで任せてもらった。

建人からは、「ストーカー一歩手前じゃね？」なんて笑われたけど、いや、これは

頼まれた（二宮が頼まれたんだけど・・・）用事があるからだ！と、言い聞かせ、彼女が居た空間に足を踏み入れる。

ただ・・・ここも、以前来た時のようなぬくもりが無くなり、色褪せて見える。

美羽は、俺の視力も奪い取ったのか？

俺がこの役目を担った事は、美羽は知らない。

そう・・・台北に発って3週間。まだ彼女からの連絡は、無い。

実は先週、何かに理由をつけて、台北にも行って見た。

が、やみくもに探しても美羽と会えるはずが無かった。

病院も、ロクに名前も知らない入院患者の情報を教えてくれるハズもなく、

ただただ、街を歩き回るだけになった。

二宮ですら、美羽の事は知らない事が多かった。

美羽は、聞き上手なのも手伝ってか、人に話をさせるのがうまくて、そう仕向けてるのか、

自分の事は二宮にもあまり語っていなかった。

その事で、二宮は美羽に信用されていない気がすると、今回の出来事の少し前に

美羽と大喧嘩したらしい。

つか、きっと二宮が一方的に怒っただけだと思うけど……。

その時、美羽も「ただ話す事が苦手なだけなの。てるちゃんの事は信用してるよ」と、話し、

今後は沢山りんの事も教えてね。そんな会話をしたばかりだったという。

結局、そのすぐ後にバタバタと日本を発ったため、二宮は美羽の兄が仕事で行ってる

台北で事故に遭った。……これしか、知らないのだ。

さすがに、兄の名前くらいは……と思ったが、お兄さんの名前も職業も聞いていないという。

基本ポジティブな二宮も、喧嘩した時に色々聞いておくんだつたと落ち込んでいた。

これじゃ調べようがない。

大きい病院に行ったところで、入院患者の名前も分らないんだから怪しまれて当然だ。

待つしか、無いんだろうな・・・。

分かってても、この時間の長さで空虚感が辛かった。

人を「待つ」という事自体、初めてだ。美羽と会ってから、沢山の「初めて」を経験している。

ただ残念なのは、圧倒的に「辛い・苦しい・切ない」事が多い事だ。

せめて、美羽の兄宛てに郵便などが届けば、少しまた調べられるんだけど・・・。

余程几帳面に方々に不在を伝えていたのか、ただでさえ少ない郵便は、全て

美羽宛てのものだった。

ひとつだけ、「はやし うみ さま」と書かれた幼い文字の手紙があったが、

これは間違えたんだろうな。ため息をひとつついて、ダイニングテーブルに置き、部屋を出た。

第1章9．小さな灯り

美羽から連絡がきたのは、それから更に1ヶ月後。
8月に入ってからだった。

特に用事もないのに、もしかしたら・・・そんな思いでほぼ毎日美羽の家に
行くようになっていた頃だった。

とは言っても、段々郵便や不在票も1階のポストに入らない日が多
くなったきたので
中には入らず、チェックだけして帰る日々だった。
それでも、部屋に灯りが点っていないか、必ず見上げるようになって
いた。

かなり思いつめた顔をしていたのだろうか。

建人も、ストーカー呼ばわりを止め、時々飲みに誘ってくるようにな
った。

前から仲間とはよく飲みに行ったが、それは女の子達と賑やかなク
ラブに行ったり
する事が殆ど。最近は正反対の静かなバーに男同士で行くようにな
った。

美羽への想いを自覚してからというものの、どんな女を見ても魅力を感じないようにな
ったのだ。

美羽は、色んなものを俺に置いていった。
恋心も、恋の痛さも、会えない辛さも、片想いの切なさも。

これまで、何もかも思い通りに生きてきた。他人に何かを求めたりとか、人を心底
欲しがったりとか、誰かの笑顔で不整脈でも起こしたかと思う位、
心臓がうるさくなる事とか、
そんなのはこの21年間無かった。

今日もポストには何も無かったし、このまま帰るか・・・誰か誘って
飲みに行くか・・・
そんな事を考えていたら、啓介から電話がかかってきた。

あ。飲みの誘いかな？ちょうど良かった。そう思って電話に出た。

「きたぞ！」

「は？」

「りんちゃんから！連絡、きたぞ！」

啓介の言葉で、一気に心臓がバクバクしてきた。

「・・・それで？」

力が入り、声が掠れる。

「少し前に退院してたらしいんだ。今は通院になってるって」

「帰国は・・・まだわからないのか？」

「俺にはそれだけだったんだ。携帯出れなくて。メッセージが残ってた。出国の時色々手伝ったから、ありがとうって事と。」

「そうか・・・」

「今から、てるちゃんと会うんだ。多分、彼女にはもっと話してると思う。オマエもウチに来いよ」

「すぐ行く！」

啓介の家に着いたら、もう二宮は来ていた。

「りんらしい。最初に、連絡遅くなってごめんね。って。」

最近あまり笑顔を見せなかった二宮も、嬉しそうに微笑んでいた。

色々質問したため、思った以上に長電話になってしまったんだという。

お兄さんは、インテリアデザイナーで、台北の富豪の自宅リフォームの仕事で

台北のその富豪の別宅に滞在していたが、ある日敷地内で、孫が出入りの業者の

車に撥ねられそうになり、それを庇って大怪我を負ったそうだ。

お兄さんはその富豪のはからいで、VIP待遇で入院生活を送って

いたが、最近

退院し、その別宅に戻ったのだという。

美羽も、入院中は病院で付き添い、今は看護の為一緒に別宅にお世話になっているらしい。

話の流れから、帰国が近い事を感じ、気持ちかはやる。

「りんったら、国際電話は高いから、滞在してる家からかけるのは申し訳ないし、

お兄さんの病院に付き添った時にやっと公衆電話を見つけてかけてきたんだって。

お兄さん、頭を強く打って記憶障害を起こしてたみたいなの。それで入院が

延びたのと、心配でつきつきりだったって。

その富豪のおじさまは、孫を助けてくれた事にすごく感謝してるみたいだから

国際電話代金くらい、笑って許してくれると思うんだけどねって話してたの」

ふふふ。と嬉しそうに話す。

「で？」

「うん？」

「帰国はどうなりそうだ？」

「あゝ・・・それなんだけどね・・・帰国はね。ってなったところで電話が切れちゃったの。」

何しろ・・・色々質問して長くなっちゃったから。」

は~~~~。

一気に力が抜ける。そこが大事なのに！

「でも！柊の連絡先、教えといたわ！！」
名誉挽回！とばかりに、二宮が満足そうに言った。

教えてくれたとしても、連絡が来なければかえって凹むけどな・・・。

でも・・・元気なんだな。少しでも様子がわかった事にほっとした。

にしても・・・今まで自分の話をあまりしなかった美羽が、二宮との約束を守るために

一生懸命話したんだろう。

でもその大部分がお兄さんの話で、決して美羽本人の話じゃないってところが、美羽らしいというか・・・。

どこまでも、自分は後回しなんだな。

ああ、早く会いたい。会ったら、想いを伝えて、いっぱいいっぱい甘やかすのに。

次の日は水曜日で、サークルの日だったが映画はそちのけで美羽がもうすぐ

帰国するかもしれないって話で盛り上がった。

皆、美羽を可愛がっていたし、美羽が好きだったから、美羽からお兄さんが

だいぶ回復したという知らせがあつて、相当浮かれていた。

歓迎会をしなきゃ。復学するのかな？つか、そんなのできるの？もし無理でも、サークルに来て欲しいな。

口数の少ないサラも、嬉しそうに「りんちゃんが戻ってきたら、彼女が好きな

ケーキでお祝いしようね」とはしゃいでいた。

美羽、皆オマエを待ってる。早く、帰ってきてくれ。

つか、サラに後で美羽が好きなケーキってーの、聞こう。

それからまた1ヶ月が瞬く間に過ぎた。

当然、というか何というか・・・俺の携帯に、美羽からの着信は無かった。

あまり良い関係ではなかったのだから、仕方ないかもしれない。

わかってはいたけど、この辛い現実が心をどんどん冷たくした。

まだ残暑が厳しい時もあるが、夜になると涼しくなるようになったある日。

もう目を閉じてても通えるかも。って位、慣れた美羽の家に向かっていた。

殆ど諦めていたが、習慣になっていた俺は、美羽の部屋を外から見上げ・・・

小さな灯りが点っているのを見た。

第1章9. 小さな灯り（後書き）

ケーキ、買い占めそうな勢いです。

第1章10. 走り出す

ドクン

突然、凍りかけてた俺の心臓が、激しく動き出した。

体の奥から、じわじわと熱が広がってくる。

美羽の部屋に向けて、走り出した。

ちょうど帰宅したサラリーマンと一緒にエントランスに入ると、エレベーターは最上階の10階と、9階にいた。

「あゝ。タイミング悪かったね」サラリーマンに同意を求めるように話しかけられたが、
そんなの・・・待ってられるか!!!!

彼女の部屋は真ん中の5階。

迷わず非常階段に向かった。

落ち着いて考えたら、エレベーターを待った方が早かったと思うが、体が立ち止まる事を拒否した。

確かめなきや。彼女かどうか。彼女が帰ってきたか確かめなきや。

一気に5階まで駆け上がる。

彼女の部屋は、角部屋の506！呼び鈴を押し続ける。

それだけじゃ治まらなくて、反対の手ではドアをたたき続けた。

祈りをこめて。

頼む！彼女であってくれ！！

中でドタバタと音がし、ドアがぱっと開く。

中に居たのは、この3ヶ月、ずっと焦がれていた美羽だった。

「か、香月さん？」

ぱっちりした目を、更に大きく見開き、不思議そうにしている。
突然の再会に、心の準備が出来ていなかった俺は、いきなり目の前に現れた

美羽から目を離すことができなかった。

想いを自覚してから、すれ違いでそのまま離れてしまった美羽。

離れてた期間は、美羽への想いを強くさせるだけだった。

会ったら言いたい事、したい事は沢山あったはずなのに、いざ目の前にすると、

こみ上げる想いに、何も言葉に出来なかった。

その時。玄関でドアを開けたまま、肩でドアを支え身を乗り出すように見つめる俺の視線から、逃れるように美羽は少し後ろに下がった。

心臓が、ぎゅうつと切なく疼く。なんで離れようとするんだよ・・・。

少し空いた距離を、また埋めようとズイッと室内に足を踏み入れる。一気に、最初の距離よりも縮まり、支えが無くなったドアは後ろで静かにカチッと閉じた。

その音が、同時に俺のスイッチもカチッと入れた。

目の前で、少し怯えたように俺を見上げる美羽を・・・俺はたまらず一気に抱きしめた。

美羽は想像以上に小さくて、俺の腕の強さに、俺の胸のあたりに顔が押し込められていた。

俺はというと、身をかがめ、美羽の背中から肩にかけてをがちり抱え込むような体勢になった。

腕の中に美羽がいる。

ずっと、ずっと待ってた瞬間だった。満足すべき瞬間なのに、実際のそれは更に膨らむ想いに、苦しくなる一方だった。

強く、苦しくなる想いに比例するかのようには、強くなる腕の力。

最初は驚いてなのか、大人しかった美羽も、さすがに抵抗を始める。「むむむう」

胸のあたりから、美羽の苦しそうなうめき声が聞こえ、ほぼ埋まっ

ていた顔を

一生懸命振り、横を向いて苦しそうに息をした。

その時、鼻先を美羽の髪が揺れ、かすかに香る香りに、想いがもう、体の中で

はちきれそうになっていた。

本物だ。本物の美羽が、今腕の中に居る。やっと、戻ってきた。

目頭が、熱くなった。

抵抗をしてた美羽が、俺の様子が変な事に気付いたのか、抵抗を止めてじっとしている。

少し震えているのを気付いたのか。少し俺の力が緩んでからも、逃げようとはしなかった。

それどころか、そっと腰に手を添え、優しく触れる。

「ど、どしたの？何か・・・あったの？」

こんな状況でも、純粹に心配してるみたいだ。

「会いたかった・・・」

カッコよく告げるつもりが、声が掠れるし押さえられないほど膨れ上がった

想いに、苦しさは募る。

もう心臓は、痛いくらいに早く、強く打っている。これは決して5階まで走ったからじゃない。

美羽だ。美羽の存在だけが、俺をこんな状態にする。

あまりの苦しさに、体内で膨れ上がる切ない想いを、どうにか解放したくて、美羽に
伝えたくて、

少し体を離して、美羽の両頬に手を添え、そっと顔を近づけた。唇を通して、この想いを直接美羽の体にも注ぎ込みたい。そう、思った。

第1章10. 走り出す（後書き）

5階まで一気になんて、私は無理です。

第1章11. 甘い手の平

顔を近づけながら、彼女の顔をそっと盗み見ると、大きく目を見開いていた。

両手に触れている頬は、少し冷たくて手の平に吸い付くようにしっとりしている。

ずっと触れていたい感触だ。

頬は少し冷たいのに、顔がうっすらと赤くなっているのは、抱きしめた

時に苦しかったのか、俺を意識しているのか・・・。
どうか、後者であって欲しい。

あとほんの数センチ。

バクバクと煩いくらいに高鳴る鼓動を落ち着かせるように、そっと目を閉じた。

その時

パチン。

俺が思ったよりも早いタイミングで、何かが口に当たった。

当たった。というより、押さえられてるような。

え？

目を開けると、美羽の小さな手が俺の口元を覆っていた。小さいと思ってた美羽の手の平。でも今このタイミングでそれを知りたいとは思わなくて。

「なに？」

美羽の手の平越しに、ちよつと文句を言う。

あとちよつとだったのに！

美羽は、びっくりしたように益々目を大きくした。それすらも、可愛いと思えてしまう。

「な、何？ じゃないよ！ それはこっちもセリフ！」

顔を真っ赤にさせてあわあわしてる美羽。

ああ、なんか、可愛くて仕方ないんだけど！

美羽の頬から手はずし、手首を掴み押さえられていた口元から美羽の手はずす。

「こっちのセリフって？」

「今の状況が・・・何かな、って・・・」

顔を赤くしてもによもによ呟く。

「うーん。見たままだけど。キスしたくて」

「な、なんで！？どしたの？何かあったの？か、彼女と喧嘩したとか？」

いつも落ち着いた声でゆっくり話す美羽が、慌てたように話し出す。心底、ワケがわからない。って感じた。

「美羽に、キスしたかったからだよ。理由は、美羽が好きで好きで、たまらないからだ。」

美羽と離れてる間、辛かったよ。会いたくて仕方なかった。

美羽の言ってる『彼女』が誰の事か分からないけれど、美羽以外は、誰もいないよ。」

慌てて早口になる美羽に対して、言い聞かせるように俺の言葉が美羽の心に染込むようにと願って、ゆっくりひとつひとつの質問に丁寧に答える。

ぴくん。

小さく震えて、美羽の目はまばたきを忘れたかのように、俺の顔を見つめる。

やっど。

やっど視線が初めて絡み合った気がする。

やっど美羽の視界に、ちゃんと入れた気がする。

気持ちは伝えたのに、まだ何か足りなくて。こんな言葉じゃ、全てを伝えられなくて

落ち着くと思ってた心臓は、また不規則に飛び跳ねる。

もどかしい。

この溢れんばかりの気持ちを、どう表現したらいい？ どう話せば、全てを言葉に乗せて

伝えることができるだろう？

考えがまとまらない。つまり、ありふれた言葉だけが思い浮かぶけど、

どれもこれも使い古されたような言葉で、今俺が抱えている想いを伝えるには

何かが足りなかった。

目の前の美羽は、この手を離せばすぐにでも後ろに跳び退りそうな様子だった。

もどかしい。

言葉が、足りない。どの言葉も、伝えきれない位、胸に大きなカタマリを抱えてた。

美羽にしか、解消できないカタマリ。

どうしたら、伝わる？

左手に掴んだ強く握り締められていた美羽の右手が、少し振るえ始めた。

驚き、怯え、戸惑い、疑い、そんなものが感じられるような反応だった。

違う、違うのに！伝わらない。もどかしさ。

そつと身をかめると、美羽は全身を振るわせ、掴まれた右手を更にきゅっと握り締めた。

その右手を両手でそつと包み、ゆっくり手の平を開かせると、食い込んだ爪の

跡がうっすらと残る手の平に、想いを込めて口付けた。

第1章12. 小龍包

手の平にゆっくり唇を押し付けると、両手で握り締めた彼女の手が、少し、震えた。

そっと手首に指を滑らせると、ものすごい勢いで脈を打っているのがわかった。

そっと唇を離すが、離れがたくて手の平をペロリと舐める。

「・・・っ!!」

声にならない声をあげて、美羽は手を引っ込めようとしたが、そのまま引き寄せて再度抱きしめた。

こわばった美羽の体に、拒絶、戸惑い、怯えを感じる。

「・・・ごめん・・・。怖がらせるつもりじゃ、なかった。」

「・・・うん・・・。びっくりした・・・あの・・・とりあえず離してもらいたいんだけど・・・」

・・・・・・・・それは無理。

一方通行な想いの切なさに苦しくなって、美羽の頭越しに大きく息を吐く。

「美羽にとっては、急なことかもしれないけど、俺にはそうじゃないんだ。」

信じてくれる？」

「・・・・・・・・」

相手の気持ちが気になるなんて、初めての事だ。

答えが知りたくて、でも答えが怖くて、なのに自分を止められなくて。

どんな方法で、自分が抱えてる想いのすべてを伝えたらいいのか・・・・。

美羽は、明らかに戸惑っている。彼女にしてみれば、俺は単なるサークル仲間で

その中でも親しくない方だった。

この距離を、一気に縮めてしまいたかったが、美羽を失いたくない。失敗すれば

彼女は本当に俺から離れてしまうかもしれない。

それが怖くて、なんとか自分に言い聞かせてそっと彼女を離れた。

美羽が、すばやく後ろに下がる。

あー、それ、結構ショックなんですけど。

美羽は顔を真っ赤にして目を潤ませ、眉間にシワを寄せて困ったような表情だった。

やばい。可愛い。

困らせてるのは俺なのに、今の美羽の様子を誰にも見せたくなくて（誰も居ないけど）

また自分の腕の中に閉じ込めてしまいたくなった。

けれど、それでは益々困らせてしまう・・・。

抱きしめるのを諦める事は、自分が思ったよりも辛くてかなりの自制心が必要だった。

そんな風に、難しい顔をして欲しいわけじゃない。

後ろに下がったものの、腕を伸ばせば触られる位置に居た美羽に手を伸ばした。

途端に、目を見開いて俺を見る。

そっと、眉間のシワに触れると、そこをなでた。

「眉間にシワ。そんな、難しい顔しないで」

「だ、だって」

「小龍包みたいだ」

「しょ、シヨールンポー!？」

「美羽の顔は、小さくて丸くて白いでしょ。眉間にシワ寄せてたら小龍包みたいだよ。」

本当、ガブリを食べたくなる。けど、そこまではまだ言わないでおいてあげる。

怖がられたら嫌だしね。

呆氣にとられていた美羽は、遂に噴出して、少しその場の空気が軽くなった。

良かった。突然の再会で、想いが溢れてつい行動に出してしまったけれど、

怖がらせたいわけじゃない。

ゆっくりでもいい。いずれ俺のものになってくれるなら、いくらでも待つから。

だから俺を怖がらないで。

傍に居させて欲しい。

第1章12. 小龍包（後書き）

マシュマロは沸騰しそうに熱くなって小龍包に??.

第1章13. アルコールの仕業

やっと、美羽が笑ってくれて部屋の空気が少し明るくなった。

本当は・・本当は、すぐにでも美羽の全部を自分のモノにしたかったが、

かなり苦しい選択だったが、なによりも欲しいモノは美羽の心だったから

長期戦でいくしかないと思った。

俺ってこんなタイプじゃなかったのに・・。

思わず苦笑する。

そこに、どどどどん！と大きなノックがあり、鍵のかかっていなかった

扉が背後で勢いよく開いた。

「りんっ！」

現れたのは啓介と二宮だった。

「てるちゃんっ！」

俺には見せた事のない満面の笑みで、二宮と抱き合う美羽。

えっ俺にはあんなに積極的に手を回してくれなかったのに・・。

二宮にでさえ、嫉妬してしまう。
俺、こんなんでも長期戦でいけるのかな……。

そこからは、二宮の質問攻めが始まった。

なんと、美羽の兄は最近海外で注目されている若手インテリアデザイナーの

UMIだという。モデル並みの容姿で、女性にもファンが多い。

「え？じゃあ、お兄さんの名前は“はやし うみ”っていうのか？」

「うん。羽の海って書いて“うみ”って読むの。であたしが“みう”だから

なんか冗談みたいな兄妹だね」

て事は！以前この部屋で見た『はやし うみ さま』っていうあの手紙は

間違いじゃなかったのか！！

あそこで疑問に思ってたなら、もっと早く美羽を会えたかもしれないのに……。

お兄さんは、怪我也治り仕事に復帰する事になったので、美羽だけ帰ってきたのだという。

でも、かなりのシスコンだと言うお兄さんは、なかなか美羽を帰してくれなかったんだとか……。

これからはアルバイトを探すつもりだという美羽に、啓介がサークルには顔を

出すように、気の利いた事を言ってくれ、用事の無い水曜日は必ず

行くと

約束させられていた。

それ以外にも、俺とは個人的に会って欲しいけど・・・まずは今日み
たいに啓介や

二宮にじゃなく、まず俺に連絡してくれるように、俺を信用しても
らわなきゃな。

そう頭の中で、これからの俺と美羽の事を計画していた俺をよそに、
帰国祝いを

サークル仲間でしょう！という話になっていた。

「でも・・・皆さん、忙しいでしょう？」

また小龍包みたいな感じになった美羽が、申し訳無さそうに言う。

どうやら困ったり戸惑っている時に、少し頬を膨らませ口を引き締
め、

眉間にシワを寄せるみたいだ。

また小龍包みたいだって言ったら今度は怒るかな。俺にはそれさえ
も愛しいんだけど。

美羽は皆が自分の為に集まる事を心配してるけど、皆美羽が帰って
くる事を楽しみに

待っていたから、全員喜んで集まるだろうけど。

美羽はそこまで好かれていると思ってはいないようだ。

それを二宮が上手に説明し、美羽を納得させ（少々無理矢理ではあ
ったけど）

次の水曜日にサークル棟に来る事になった。

「じゃあ、そろそろ帰るわ。もう遅いし。また連絡するからね」

俺はかなり名残惜しかったが、さすがに、美羽も疲れが出たのか、小さな欠伸が

出たのでしぶしぶ切り上げる事にした。

部屋を出てドアが閉まりそうになったその時。

「香月さん、酔ってるみたいだから、気をつけてね」

美羽の心配そうな声の後に、ドアが閉まり、カチャリと鍵のかかる音がした。

え！？確かに・・・ここに来る前ちよつと飲んだけど・・・
もしかして、全部酒の所為にされた！?!？

ここから、想像以上の彼女のニブさに翻弄される事になる。

今日は、ほんの幕開けのようなもんだった――――
――――。

第1章13. アルコールの仕業（後書き）

超絶ニブニブな天然ちゃんを書いてみたかった。

決死の告白で、1章は一応終わりです。

さて。次は片想いに苦しむ2章。の、予定。

第2章1. 自覚の無い無自覚（前書き）

第2章は、ちよつとコメディータッチになるかと。

第2章1. 自覚の無い無自覚

「今」

そこまでメールで打つと、文章作成欄の下に、「どこに居るの?」と出た。

携帯の予測変換ってヤツだ。

その後にも「何してる?」「話せるか?」「時間ある?」等と予測変換の候補文は更に続いていた。

ここんどこれだけ美羽に連絡をしてるのか、その頻度が改めてわかって

苦笑する。

再会したあの日。

美羽のマンションに居る時に、やっと連絡先を交換した。

今までは、美羽の方だけが俺の携帯番号を知ってたから、どうにも動けず

ひどく辛かったし、美羽の中での俺の存在の小ささに情けなくさえ思っていた。

まあ、海外で利用できない携帯を持って海外に行ってたんだから、知ってたところで

連絡できなかったんだけど・・・。

それ以前に、連絡先を交換してないという薄い関係性が嫌だったん

だ。

でも

お互い携帯番号もメールアドレスも交換したからと言って、美羽から連絡がくるなんて事は無かった。

けど、俺の中には美羽でいっぱい。

いつも美羽の事を考えていたし、同じ街に居るのに、同じキャンパスに居ないって

だけで、すごく寂しさを感じていた。

それでついつい、時間があると携帯に手が伸びた。

あの告白も、マンションに行く直前に飲んだ酒の所為にされて、全く信じて

くれてないし、でも長期戦でいく。

ちゃんと気持ちに向いて欲しいから、強引に奪う事はしない。と決めたから、こうしてマメに

連絡して、俺の存在に慣れてもらう事から始めたわけだ。

はあゝ・・・俺、何こんなチマチマやってんだろ・・・。

本当は会いたい気持ちのままに、飛んで行きたかったけど、最近はお家の仕事も

手伝い始めたのもあって、なかなか以前のように時間は取れずにいた。

美羽にきちんと向き合う為にも、仕事にも真面目に取り組まないと
な！

さて・・・再び携帯の画面に目をやる。

ずらりと並んだ美羽専用とも言える予測変換の候補文の中から今はどれを選ぶ？

少し考えて、「何してる？」を選び、送信した。

今はもう夜の12時だ。いくらなんでも「どこに居る？」は無いだろう。

部屋で本を読んでもか、DVDを見てるか・・・それか、もう眠ったか。かな？

本を読んでいたら比較的早く返信があるだろう。

DVDを見てたり、眠っていたら、まず返信は無い。

電源を切ってるからだ。これも、何度かの連絡のやり取りで知った事だ。

間をあまり置かずに返信が送られてくる。

あ。本を読んだか？

「買い物してます」

は！？

さっき確認したばかりなのに、念のためもう一度時間を確認する。

間違いない。夜中の12時14分だ。

無性に心配になって、上着と車のキーを適当に掴み、電話する。

「もしもし?」

いつもの、のんびりした口調で出た。周りは少し騒がしい。

「美羽、今、どこにいるの!?!」

「えっと、家の近くのコンビニ・・・」

「こんな時間に何で!?!」

心配で、思わず口調が荒くなる。

「お水を買いに・・・あとパンも買おうかなあ。と」

美羽のマンションの近くのコンビニは2店舗。最寄の駅に近い方と、その逆側が

俺の家に近い方。

どっちだ!?!俺の家に近い方でありますように・・・。

「どっちのコンビニ?」

「Lです」

駅側だし!!! 確かに、美羽の家からだとそのちのコンビニの方が
少しだけど
近い。

急いで車飛ばして・・・ここから10分で・・・行けるか？

「すぐ行くから。店から出ないで！」

「え？どうして？」

「心配だからだよ！今から向かうから一旦切るけど。絶対出ないで
！」

焦って早口で言うと、すぐにエンジンをかけた。

あのコンビニは駅が近いのもあって、駐車場が無いし、通りに車は
停め辛い。

タクシーも多いし・・・美羽のマンションの前に車を置いて、走るか
・。

全く!!! なんでこんな時間に1人で出歩いてるんだ！

何かあったらどうする！

怒鳴りたい気持ちと、優しく抱きしめたい気持ちと、相反する想い
が胸に渦巻いた。

思ったよりも車はスムーズに美羽のマンションに着いた。

すぐにコンビニに向かって走ると、コンビニの看板の明かりが見え
たところで

こちらに向かってくる美羽の姿が遠くに見えた。

チッ！と思わず舌打ちする。

出るなって言ったのに！！

すると、俺の視界から一瞬美羽が消えた。

スーツ姿の会社員らしき2人組の男が美羽の前に立ちはだかったのだ。

1人は、美羽の腕を取った。

何触ってんだよっ！！！！

まだ距離はあったが、「美羽っ！！」と大声で呼びかける。
緊急事態だ。ご近所迷惑なんか考えられるかっ！

こんなに全力で走ったの、何年振りだろう？今ならオリンピック出れるかも。って
位のスピードが出た気がする。

近くまで来ると、男たちは見るからに酔っ払っていた。

乱暴に、男の手を美羽から離すと、男はちよつとムツとしたようだった。

「大丈夫？」

美羽が怯えてるんじゃないかと確認したら、きよんとしていた。

「駅までの道を聞かれたの」

「駅ならここまっすぐ行って、一つ目の信号右。そしたらもう見えるよ」

美羽の代わりにおっさんらにそう言うと、美羽を連れ出そうと歩き出した。

・・・と、足元に黒いモノが落ちている。
拾い上げて見てみると・・・

「ちょっと」

諦めて歩き出したおっさん呼び止める。

「これ、あんたらの？」

気まずそうにしているおっさんに投げつけ、美羽の肩をぎゅっと抱いて歩き出した。

とにかくあいつらの視界から美羽を連れ出したかった。

そのままの勢いでマンションまで戻ると、美羽には少し早い速度だったのだろう。

息を切らしていた。

「こんな時間に危ないだろう！！俺が来なかったらあいつらに何されてたか・・・」

「え？だって、道がわからないって言われたただけだよ？」

「あのおっさん、この駅からの定期券持ってたよ。駅がわかんないワケないじゃん。」

美羽は絡まれてたの!」

「酔ってて方向わからなくなったのかな?」

あの・・・会話が噛み合っていないんですけど?

「こーゆー時は俺に連絡しろよ!」

「え? どうして?」

「危ないからだって! もう12時過ぎだぞ!」

「大丈夫だよ。香月さんだって遠いのに・・・」

「俺はいいの! また誰かに絡まれるかもしれないだろ!」

「私が?? 無いよ〜ないない。」

可笑しそうに笑うけど・・・今、ほんととあぶなかったって自覚無いの?

俺、今日眠れそうにないんですけど。

第2章1. 自覚の無い無自覚（後書き）

溺れちゃった柊。自覚のない美羽。

第2章2. ギャップに苦しむ熱視線

美羽の帰国後、ようやく皆でお祝いをする事になった。今日は久しぶりに美羽が部屋に来る事になっている。

美羽の帰国祝いだと言うと、美羽は恐縮しまくって、いつも通り映画を見て皆でお茶する事になった。

水曜日は皆講義が午前で終わる。

午前最後の講義中から、俺はそわそわしていた。

深夜のコンビニに美羽を奪還しに行った日は、お説教途中に美羽は「見たいTVが始まっちゃう！」と早々に逃げ出した。

俺は深夜の海外TVドラマの再放送に負けてしまったわけだ・・・。

「ランチ、どこで食う？学食？」

講義が終わった瞬間に、啓介が声をかけてきた。

ランチ・・・そうだ。

「今日は短大の方のカフェテリアに行こうぜ。」

きっと、二宮と先に短大で会ってるだろうと予想しての事だった。

二宮が好きな啓介は、快くそれに応じ、ふたりでカフェテリアに向かった。

大学と短大は、同じ敷地内にあるが、そもそも敷地が広く、短大も規模がそこそこ

大きいため、それぞれの構内に学食とカフェテリアなどがあつた。
短大のカフェテリアは結構離れていたが、美羽が在学中、ふたりはよくそこで

ランチをとっていたと二宮から聞いていたので、迷わずそこに向かった。

カフェテリアに足を踏み入れると、周りがざわめいた。

「香月さんよ。斎賀さんもいる！」

「え！なんでえ???でもラッキー!!！」

ああ・・・忘れてた。俺らがなんでこっちに来ないのか。

短大は生徒の殆どが女子で、いちいち周りでうるさいから避けてたんだった。

適当に笑顔を振りまく啓介に対し、俺は段々機嫌が悪くなってくる。
ああ！早く美羽を捜さないと・・・。

と、思った時、食事をトレーに乗せてやってくる二宮の姿が見えた。
二宮に少し隠れるように、美羽も居た！

一気に気持ちが晴れる。

向こうも、俺達に気がついたようだった。

美羽の方に向かおうと、歩き出すと、まつげオバケのような女が立ちほだかり、

俺の手を取って「一緒にランチしません？」と、まつげで俺を扇ぐように目を

パチパチさせた。

あー！もう、うぜえ！

「あ。はい。お見かけしました」

・・・

「なんで、目を逸らしたの？」

「えっと・・・あの、誰かと待ち合わせかと思って・・・話しかけたりしたらお邪魔かと思って」

美羽には、まだ自分が想われてるって事を信じられてないようだった。

「俺は・・・」

「オイ、そろそろ始めるぞ」

啓介の言葉で、DVD観賞が始まった。

今日は犬好きだという美羽のリクエストで『ベートーベン』を見る事になった。

俺はガキの頃、何度も見た映画だったし、隣に美羽が居るといふこの状況で

映画なんて見てられなかった。

それだけ、恋心を自覚してから美羽と会えない時期が続いたのは大きかった。

美羽欠乏症と言っても良かった。

3ヶ月という時間は、限界が無いんじゃないかと思うくらい、気持ち膨れ上がり

かなりの熱に浮かされていた。

今、どうしてるか知りたくてメールし、そしたら声を聞きたくなる。声を聞いたなら

会いたくなる。会ったら触れたくなる。

どんどんどんどん、自分の中で欲が出てきて、本当に限界なんて見えない状態だ。

3ヶ月でそこまで大きくなってしまった俺の気持ちに対して、美羽は、3ヶ月前と

なんら変わらない態度で戻ってきた。

この3ヶ月で、俺への気持ちを自覚・・・なんて、そんなうまくできた恋愛映画の

ような展開には、残念がららなかった。

帰国した日、美羽のマンションで会った二宮には、俺のちょっとした暴走がバレたのか、

美羽は恋愛に慣れてないんだから！と、釘をさされた。

俺も、体の中で暴れ狂う熱を抱えながらも、美羽を失うわけにはいかないの

ゆっくり、俺と、俺の気持ちに慣れていってもらおうと思ってなんとか抑えて

いるわけなんだけど・・・

なにしろ鈍い。

隣で、映画を見ながらにや〜と、総崩しの笑顔を見せてる美羽を見て

こっそりため息をつく。

なんで、その笑顔を俺に見せてくんねーかな・・・。

映画が進むにつれて、美羽は表情をくるくると変えた。

俺は、そんな美羽に触れたいのに触れられない、もどかしく切ない想いを抱えて

時間を忘れて見つめていた。

映画が終わると・・・

「柊・・・うざいわ！」

いきなり、顔を真っ赤にして那智が言い出した。

は？何がだよ。オマエになんて何もしてねーっつの。

ムツとして那智を見ると、顔を赤くしてる那智の隣で建人はニヤニヤと可笑しそうにしていた。

見渡すと、皆同じような感じだった。
普段無表情な事が多い東に至っては、なぜか満足気な微笑みを見せ
ている。

「？なんだよ」

「柊、りんちゃんの事見すぎよ！こっちまで照れてくるわ！」

「あれは無いよな〜」

「恋に落ちたプレイボーイは、一途だねえ」

口々に、好きな事を言ってくれる。

でもこれにはどうにも、反論が出来なかった。
なぜって、真実だから。

美羽の事はいくら見ても見飽きない。見てるだけ、っていうのは寂しいけれど

でも今日の前に居る。それだけでも嬉しかった。

が。当の本人は・・・

「え？どうしたんですか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ん？りんちゃん、何も・・・思わなかったの？」

那智が、まさかねえ。といった風情で聞くが・・・

「？何がですか？」

「映画見てる間、柊が何してたか、ほんとに気付いてないの？」

「え？香月さん、映画見てなかったんですか？」

ほんと鈍い・・・（泣）

周囲の空気に構わず、「お茶、淹れますね」と、美羽は元気に立ち上がった。

備え付けの簡易キッチンに美羽が向かうと、

「りんちゃん・もしかしくても相当鈍いのか？」

「お前があれだけ見つめてて、こっちが照れて鳥肌モンだったのに、それに

まーまーったく気付いてないのか!？」

「本当、こっちが照れたんだけど・・・」

「なんか部屋の温度上がった気がするし」

皆好き勝手な事を言い出した。美羽に関しては、行動で察してもらおうなんて

無理な気がする。

はー。とため息をつく、皆一斉に「頑張れよ」と言った。

そこに、美羽がお茶を持ってきた。有難い事に、美羽が話題を変えてくれた。

「あ、りんちゃん、なにこれ？すごく甘い香りがする・・・」

「台湾のお茶です。香りはすごく甘いんですけど、烏龍茶の一種なんです。

向こうでとても気に入って・・・あの。こんなお礼しか出来ないけれど、是非飲んで欲しくて」

「美味しい！香りは濃厚な甘さだけど、とてもすっきりした味だね」

「ハイ」

にっこりと嬉しそうに笑う美羽。

確かに、初めて飲むお茶だったが、すごく香りが良く、後味の良いお茶だった。

ふーん。美羽は台湾のお茶が好きなのか・・・でもコレ、流行りそうだな。

オヤジに提案してみるか。

第2章2. ギャップに苦しむ熱視線（後書き）

恋愛経験の無い鈍い女の子に、振り回されておたおたしています（笑）

第2章3. 会いたいキモチ

約束の取り方が、わからない・・・・・・・・・・

今までは、そんな事考えた事も無かった。

相手が女だと、大体が向こうから連絡してきて、俺は気分次第でOKしていた。

たまに俺から連絡する事もあったが、その時は何も言わなくても「今日会えるの?」と、飛びついてきたものだった。

でもこれが美羽相手だと・・・・・・・・

「今、どこに居る?」

「家です」

・・・・・・・・なんでそこから「会える?」って聞かない!?

「今から会えるか?」

頑張って言ってみても・・

「何かあったんですか?」

・・・用事がなきゃ会えないのか!?

「少し話がしたくて」

更に食い下がってみる。

「あ。じゃあ、もうパジャマなんでこのまま電話をお願いします」

・・・だから！会いたいんだって！

「そっか・・・長くなりそうだから、今日はいいよ。」
少し引いたら、気にするか？？」

「あ、そうですか。じゃあおやすみなさい」

・・・おいっ！

「ちょっと待って！もしもし？？」

「あ、はい？？」

「次、いつ会える？」

「え？」

「会いたいんだ」

よし！言っただぞ！よくやった！俺！

「ええっと・・・あ！再来週の火曜日なら」

・・・さ、再来週って！！！！

これが5分前に実際に交わされた会話だ。

最近の俺は、家の仕事の手伝いでとても忙しい日々を送っていた。
中国茶専門のカフェ、という企画は、自分でもびっくりする位
なり通った。

丁度、大通りから1つ、細くて趣のある路地を入ったところに、英
国風のカフェを

数年前にオープンしていたのだから、最近業績があまり良くない。
そこを、どうするかってところに、俺がこの企画を丁度持ち込んだ
ように

その店を中国茶専門のカフェにするらしかった。

英国風カフェというのは、最近多くなってきたし、一時期のブームで何を

思ったか当時の店長がアイドル風の女の子を雇ってメイド喫茶みたい

に
してしまったものだからガラリと客層が変わり、開店時の常連客が遠のいて

しまったのが痛かった。

だから、企画がすんなり通ったのはラッキーだったんだけど・・・お茶だけじゃなく、

更に、最近のヘルシーブームもあるし、2階にはお茶を使った料理を扱うフロアにしようと

いう事になり、考えていた以上に大事。ビル全体の大改装となってしまった。

だから最近は本当に忙しい。帰宅が深夜、なんて日もザラだ。

それもこれも、開店前のパーティーには美羽を招待したために、初めてって位

真剣に仕事に取り組んでいるからなんだけど・・・。

そんな毎日を過ごしていて・・・かれこれ5日、美羽に会っていない。

美羽には、毎日会いたい。毎日でも足りないくらいだ。

いつも傍にいたいし、いつも美羽の存在を感じていたい。

電話を切ると、すぐにまた声が聞きたくなるし、会うと離れたくなる。

それが・・・俺ひとりの感情なのが、とてつもなく切ない。

最近アルバイトを始めた美羽は、以前にも増してそっけなくなった。2週間なんて・・・待てるか！

いつも、会いたい。それは、俺の独りよがりなのか？

数日後、早めに仕事を切り上げて、美羽のマンションに向かった。
びっくりするかな。

普段なら、この時間なら居るはず。もし留守でも帰ってくるまで待つつもりだった。

びっくりさせたいから、連絡もしない。何時間でも、待つ。

美羽に会うのは約1週間ぶりだ。どんどん高鳴る鼓動に、足も速まる。

ピンポン♪

・
・
・

ピンポン♪

人の気配を感じないのが気になって、ドアノブに手をかけると、あっさりと

ドアが開いた。

・・・え？物騒だな・・・。

期待で高鳴っていた鼓動が、別な意味でどくどくと脈打つ。

「・・・美羽？」

室内に足を踏み入れると・・・

一切の家具も人の気配も無く、見るからに寒々しい空き室となっていた。

第2章4. これは夢か幻か

誰もいない。

何もない。

キッチンはどうすらホコリがかぶっていた。

また、俺の世界から色が無くなる。

また、俺の世界からぬくもりが無くなる。

また、俺の世界から・・・美羽がいなくなる？

何分経ったかわからない。

目の前の光景が信じられなくて、ただ立ち尽くしていた。

その沈黙を破ったのは、ポケットの中の携帯。

美羽かも！？焦って通話ボタンを押す。

「柊？オレだけど」

「・・・けい、すけ。か」

「・・・どうした？なんか、変だけど」

「美羽が・・・いないんだけど。」

「オマエ、大丈夫か？」

「え？」

「りんちゃんは、お兄さんがいる台湾に行っただろ。一度戻ってきたけど、

学校退学したのもあるし、事故の後遺症で足悪くしたから、りんちゃんも

一旦帰国してすぐ行ったじゃん。

・・・オマエ、大丈夫か？」

「うそだ！お兄さんは完治に少し長引いたけど、後遺症なんて無いって。

それで秋に戻ってきただろ！？」

こっちでバイト探してただろ！?!？」

「・・・柊！」

うそだ

先週会ったのは誰だ？

あの笑顔は？数日前に、電話で話した声は？

「うそだ！」

気付いたら、俺は自室のベッドだった。

「・・・夢？」

ほっとしたのもつかの間、それは一気に不安に変わる。

夢？本当に？

美羽のマンションが空き家になっていたのが夢？
それとも、1週間前に会ったのが夢？

サイドボードの携帯に手を伸ばす。

発信履歴に、数日前に美羽にかけた証拠が残っていた。
それを見ても、まだ不安は胸の中にしつこく残っていた。

そのまま電話をかけるが・・・出ない。

どうにもじつとしていられなくて、適当に着替え、車のキーを手に飛び出した。

ピンポーン、ピンポン♪

呼び鈴を押し続ける。

本物の美羽を見るまで、安心できない。
今すぐに、会って触れて確かめたかった。

「はい・・？」

少しして、そつとドアが開く。

目の前には、パジャマの上からカーディガンを羽織り、眠そうにした美羽が現れた。

眠っていたのか、いつも肩のあたりでふわふわしている髪が乱れて顔に少しかかって

それが色っぽくも見えた。

「美羽・・・居たんだ」

本物が目の前に現れて、空き家が夢だったのだとようやく安心できた。

それでも、本物だともっと実感したくて、美羽に向けて手を伸ばす。

「えっ・・・」

起き抜けでまだぼんやりしていた美羽を、一気に抱きしめた。

柔らかさと、暖かさで、冷えた心が一気に熱を持つのがわかった。

自分のモノにしたい。

強く、強く心からそう思った。

「美羽・・・俺、美羽とずっと一緒に居たい。少しでも、離れていたくない。」

腕の中の美羽が、ぴくん。と少し体を強張らせた。

美羽を好きになってから、こんなにのんびり構えていたのは、ひと

えに美羽が

恋愛に関して逃げ腰になってるように思えたからだ。

鈍い、というのもあるけれど・・・それ以上に、「レンアイ」というものから

意識して顔を背けているように見えた。

だから、美羽が心を開いてくれるまで、そばで見守ろうと思ったた。

けど。

思った以上に、ハマりこんでたみたいだ。

相手がいないと、生きてけないかもしれない恋なんて。

1年前ならバカにしていた。そんな俺が、あんな夢だけで、身支度とか、時間とか、

そんなの考えてられなかった。

生きるか、死んだようにただ過ごすか、美羽は俺の中でそれ程に大きな存在だった。

美羽の柔らかさに甘えて、更に腕に力をこめる。

「俺・・・ここに引っ越してこようかな」

「悪いが、部屋は空いてないよ」

いきなり冷たい、ナイフのように鋭い声が響いた。

俺より少し高い位置から、見るものを射殺せるんじゃないかって位に鋭く

睨みつける男が、壁に体をもたせかけ、腕を組んで立っていた。

「お。おにーちゃん・・・」

美羽が、少し困ったような声色でつぶやく。

これは・・・夢じゃ、ないよな。

シスコンという噂のお兄さんの前に、どうやら俺は最悪の登場の仕方をしたらしい・・・。

第2章5. 変化への戸惑い s i d e 美羽（前書き）

美羽視点です。

同年代の子との交流に、あたしは心を閉ざすようになった。

それを、お兄ちゃんに話そうとは思わなかった。

だって、あたしにとってもお兄ちゃんは特別だったから。

較べられて悔しかったけれど、お兄ちゃんの妹である事が誇らしかったから。

そんな子達よりも、ずっとずっとお兄ちゃんが大事だったから、あたしは

無理に友達を作ろうとしなくなった。

だから、入学早々、屈託無くあたしに話し掛け、最近有名になったお兄ちゃんの

事を知っても、態度が変わらない輝ちゃん存在は、驚いたし嬉しかった。

初めて、学校帰りの寄り道が楽しいと思った。

それでも、やっぱりお兄ちゃんは特別な存在だった。

だから、楽しい学生生活を捨てても、お兄ちゃんの元に行こうと決めた。

あの頃、あたしはまだ自分の話がうまく出来なかった。

それまで、あたしの事に興味を持ってくれる存在は夏美叔母さんとお兄ちゃん位。

「トモダチ」に自分に興味を持たれるなんて、初めてだったから何を話せば

良いか分からず、輝ちゃんと親しくなってから専ら聞き役だった。

輝ちゃんにも、日本を発つ事をうまく話す事が出来なかった。

あの時、本気で怒ってくれて、本気でぶつかってきてくれて、本気で心配してくれて、
輝ちゃんに、今までの話をいっぱいした。泣きながら、今まで胸に溜めてきた
事をいっぱい話したんだ。

でも

このキモチは、どう話したらいいかわからない・・・。

あの日、帰国した日の夜の出来事を。

なんで、彼はここに来たんだろう？
なんで、あんなに焦ってたんだろう？

・・・なんで、あたしを抱きしめたんだろう？

なんで、手の平にキスしたんだろう？

なんで、なんで好きだなんて言ったんだろう？

「もしかしたら」なんて考えたくない。

そんなの、違う。あり得ない。だって、香月さんには大人っぽい綺麗でお金持ちの彼女が居る。

送別会の日に、「柊はあたしと一緒に過ごすから、そっちには行かないわ」

そう、伝えに來たあの人が。

「あなたの送別会だから行った方がいいって、言ったのよ？でも、彼は行きたくないって言ったのよ、なら仕方ないわよね？」

そう、彼女は言ったのだ。

香月さんに嫌われてる事は知ってた。部室を追い出された日も、すぐに誤解は解けたけれど、でもあの時、香月さんはあたしを汚いモノでも見るような目で見てた。

胸がぎゅうつと痛くなる。

そんな目で見られるのなんて、慣れてるはずなのに。なんで思い出しただけで苦しくなるんだろう。

香月さんとは、あのギクシャクした状態のままで別れた。

だから、だからあの日の夜の事が信じられないのだ。

少し香ったお酒の匂い。

きつと、酔っ払ってるんだと思った。

でもあれから香月さんの行動が何だか変だ。

電話やメールがよく来るようになった。

聞いても特に用事があるわけでは無い。居場所や何をしてるか聞かれるだけだった。

まるでお兄ちゃんみたいだ。

でも、当たり前だけど彼はお兄ちゃんなんかでは無くて。

考えすぎて・・・熱が出た。

1人でベッドで眠っていると、枕元で携帯が振動し、着信を知らせた。

画面を見ると、『香月さん』という文字が見えた。

ど、どうしよう!?! どうしよう!?!

焦って通話ボタンを押す。

「も、もしもし」

どうしよう、なんか声が裏返ってる気がする。

「今、どこに居る?」

「家です」

「今から会えるか？」

ええ！？ど、どうしよう・・・。

「何かあったんですか？」

「少し話がしたくて」

熱が出て寝てるなんて言うのも何か言いにくいし・・・

「あ。じゃあ、もうパジャマなんでこのまま電話をお願いします」

「そっか・・・長くなりそうだから、今日はいいよ。」

「あ、そうですか。じゃあおやすみなさい」

？やっぱり、わからない・・・。

「ちょっと待って！もしもし？？」

「あ、はい？？」

「次、いつ会える？」

「え？」

「会いたいんだ」

一気に顔が熱くなった気がした。

「ええっと・・・あ！再来週の火曜日なら」

香月さんは「そんなに先！？」とか言ってたけど・・・

なんで・・なんで、会いたいんだろう? ?
わからない事だらけで、頭から湯気が出そう。

その後、タイミングよくかかってきたお兄ちゃんからの電話に、思わず

「お兄ちゃんくくく! 」と泣いてしまった。

「どうした!? 美羽、辛いのか? ?」

お兄ちゃんは声だけで分かるくらい、慌てていた。

そりゃいきなり泣き出したら慌てるよね。でもその時は、本当に、キモチがぐしゃぐしゃで、熱くて苦しかったんだ。

「仕事終わったんだ。もう少ししてから帰ろうと思ってたけど、後処理したらすぐ帰るから! 待ってろ。な? 」

そう言って、それからあたしが落ち着くまで沢山色んな話をしてくれたお兄ちゃん。

やっぱり優しいなあ。あたしにとっては、お兄ちゃんはいつまで経っても

パパでもありママでもある、本当に特別な存在だ。
少ししたら、すっかり落ち着いて眠る事が出来た。

まさか、数日後に本当に完全帰国するとは思っていなかったけれど・
。

第2章5. 変化への戸惑い *side* 美羽（後書き）

ちよっとは意識し始めてる・・・らしい！

第2章6. タイミングの悪い男

俺は今、自分の事をものすごくタイミングの悪い男だと思っている。

美羽の事になると、普段の冷静な俺がどっか飛んじまう。

いつも空回りだし、決死の告白は酒のせいにされるし。

そして今。

「いい加減、離れてもらえるかな？」

美羽の兄である羽海さんが、日焼けした整った顔に黒い笑顔を貼り付けて

近づいてくる。

べりっ。

実際、そんな音がするんじゃないかって位の勢いで、俺の腕から美羽が引き剥がされた。

勢いで、ふらつく美羽を今度は自分の腕の中に閉じ込める。

兄といえども、その光景は俺の嫉妬心に火をつけた。

「ふん。羨ましいか？」

そんな俺の様子も、ちゃんと感じている彼は、目的のものを取り

戻したにも

関わらず、俺に敵対心むき出しの視線を向けていた。

「もう1度言ってる。悪いが部屋は空いてない。俺が帰国したからね。

用はそれだけか、なら帰れ」

そう言うと、美羽を腕の中に閉じ込めたまま、回れ右して俺に背を向けた。

「ちょ！ちよっとおにーちゃん、香月さん、来たばかりなのに・・何か用事があるのかもっ」

「今は朝の5時だ。こんな非常識な時間にいきなり来て抱きつくよ
うなヤツの用事なんざ
聞かなくていい」

え。一刀両断ですか。

つーか、今が朝の5時だなんて知らなかった。
もう、時間とか見てる余裕が無かったんだ。

「抱きつくって・・・！変な事言わないでよ。きっと悩みがあるし、
お酒飲んでるんだよ。
この間だって・・・」

あ。今、このタイミングでそれ言っちゃうワケ？

「この間!?!」

すいません・・・人間のはずのお兄さんから、角が見えるんですが、俺の見間違いでしょーか？

「お、お兄さん、あの・・・」

柄にもなく、緊張してどもっちまう。こんなの、会社の仕事手伝わて大きな

プレゼンやった時だって、全然緊張しなかったのに。

「君にそう呼ばれる筋合いはないね」

あ。鬼が振り向いた。角はやっぱり見間違いなんかじゃなかった。

「おにーちゃん！そんな酷い事言って！だってこんな朝早く電車も無いでしょ！」

あ、天使の声。

とっさに車のキーを隠そうとしたが・・・

「車で来たろ？今更キーを隠さなくても、もう気付いてる」

埒が明かないと思ったのか、お兄さんは美羽を美羽の部屋に押し込むとドアを

閉め、「出てくるなよ！」と言い、玄関にやって来た。

「お前か？美羽を泣かしたの。2度とウチに来るな。つーか美羽にも近づくな」

また壮絶に黒い笑顔で言い放った。

え？美羽が泣いた？

「美羽が・・・泣いたんですか？」

お兄さんの顔が一瞬、歪んだ。余計な事言っただけで思ってるみたいだった。

「とにかく帰れ！」

今度は俺が、部屋の外に押し出された。

力には自信があるし、抵抗しても良かったんだけど、ここで問題起こしたら益々

こじれるだけだ。

そう思って、とにかくここは引くしかないなって思ったんだ。

扉の外に出て気付いた事。

隣の505号室のドアが開いてた。騒ぎで起こしたかな？

そう思って、外に出ると・・・エントランスを出たところに、俺は見てしまった。

『空き室あり。入居者募集中』のポスターを。

下には、『5階のお部屋。日当たり良好！』とも書かれていた。

俺はピンときた。隣だ。あれは空き室だったんだ！

この時の俺の顔には、きつとお兄さんに匹敵する位の黒い笑顔が浮かんでたと思う。

さすがに、隣人は追い出せないだろう？

もう何でもいい。美羽の傍にいられる、理由だったらどんなモノでも欲しかった。

俺は連絡先になっている不動産屋が、開店すると同時に飛び込んだ。

「・・・申し訳ありません。昨夜お申し込みがありまして・・・」

「それ、どうにかありませんか？契約はまだなんでしょう？」

「ええ・・・ご入金はまだですが・・・今入金の確認をしようとしていたところで・・・」

「悪いけど、こっちに譲ってくれないかな」

悪いなー。と思いつつ、父の会社の名前を出す。俺、こんなやり方一番嫌いだったハズなのに。

「ですが・・・少々お待ちを。」

おっさんが、振り返って事務の女の子に入金の確認を急ぐよう、指示をした。

数分後。

「申し訳ございません。入金が朝一番にされておりまして、これはもう契約成立となりますので・・・」

「無理？」

「うちの信用問題にも関わりますので・・・申し訳ございません・・・」

。あの。

香月グループのご子息でしたら、もつと良い物件が・・・」

ダメなんだよ。あそこじゃなきゃ、意味が無いんだ。

ああ。俺ってほんと、美羽に関しては相当タイミングが悪い・・・。

第2章6. タイミングの悪い男（後書き）

初めての恋は空回り
W
W
W

本当は、何回かはその日の仕事を放り出して行こうかと思った事もあった。

どこか、心の中では「明日頑張ればいい」って気持ちがあったんだけど、ある日

美羽に電話をした時に、料理中だとかでお兄さんが出た。

「またオマエか・・・。なんだよ、お暇な大学生は他にする事ねーのか？」

心底呆れたような声のお兄さんに、家の仕事を手伝っていると話すと、ちよつとだけ

対応が柔らかくなった。

「ふん。守りたい物があるんだったら、仕事に手を抜くなよ」

実はちよつと冷や汗モンだった。投げ出さなくて良かったー！さらにその口調から、

え？俺、もしかして認められた？と思ってお礼を言うのと、

「は？オマエの『守るもの』はウチの美羽じゃねえ！」って言われたから、

まあ・・・あくまで対応が柔らかくなったのはちよつとだけ。だけど・・・。

幼い頃にご両親を亡くされて、叔母さんが結婚してからはお兄さんが美羽の

保護者として育てたようなものだ。その意見は経験者の言葉だったから、

益々仕事に励んだわけだ。

そんなこんなで、とにかく仕事を優先した。

まずはお兄さんに第一印象最悪の烙印を押されてしまった為に、なんとか挽回しなきゃいけないから、

その間も、勿論美羽に会うための作戦は考えていたワケで。

これを持って行けば、さすがに門前払いは無いだろう。と踏んでの事だった。

[illegible]

「つーか、会わせてもらえないっつーか。」

「りんちゃん、好きなケーキって、ウチのケーキよ」

John's ccとは、沙羅のオヤジさんが経営しているカップケーキ専門店だ。

139

またたく間に行列必至の人気店になった。
今では大阪・神戸・名古屋に福岡と店舗を増やしている。

「前にね、うちに遊びに来た時に食べてそれからよく買いに来てくれるのよー。

言ってくれたら用意しておくよって言うのに、いつも並んで買っていくの」

美羽らしい。お互いが美羽を思い浮かべ、笑みをこぼした。

また、俺の知らない美羽が現れた。

サークルのソファに隣り合って座ってる間、俺は一体どれだけの美羽を見過ごして

きたんだろう・・・。

今はまだ、それを取り戻す時期なのかな・・・。

「りんちゃんはね、特にストロベリークリームに、3種のベリーが乗ってる

スペシャルベリーカップが好きだよ」

「スペシャルベリーカップだな・・・」

モバイルメモに早速登録する。

「明日、欲しいんだ」

「柊は並ぶ？」

「ワリ。それは勘弁して」

「ふふ。だよね。じゃあパパに頼んで用意してもらうね。本店で良

い？」

「ああ。悪いな、頼むよ」

「良いよ。柊からの頼みごとなんて初めてだもの。頑張ってね」

時間を確認して、電話を切った。

俺の中で、美羽がどんどん増えていく。溢れそうな位に美羽でいっぱいなんだけど、溢れさすなんてそんなの勿体無くって体いっぱい、抱え込んでる感じだった。

どれも取りこぼしたくない。

どれもこれも、俺には大事なピースだった。

デスクの上には、シルバーの飾り縁がデザインされた大きめの封筒。明日、パーティーに誘おう。

第2章8. 予期せぬ人物（前書き）

大変、お待たせしました!! すみません!

第2章8. 予期せぬ人物

色々悩んだ結果、アポなしで行く事にした俺は美羽の部屋の前に立っている。事前に約束したら、お兄さんに美羽を連れ出されそうだとか待ち構えられそうだとか追い出されそうだとか、そんなのでは断じてない！……と、思う。…思いたい。

自分自身への言い訳に嫌気が差して軽くふっと息を吐くと、その行為に苦笑がこぼれた。

全く：美羽の存在は、俺をどんどん弱くするみたいだ。年の割にはそれなりに沢山の事を経験してきたけれど、『誰かに想われない』という気持ちは初めてだった。その想いは、自然と『嫌われたくない』『喜ばせたい』と増えてきて、どんどん強くなる想いとは反比例して、どうにも動けなくなった。昔の俺がこの姿を見たら、鼻で笑う気がする。でも……本当に欲しいモノの前では、どんな人間だって臆病になるものだ。

「えーと。とりあえずお兄さんが居ませんように！」

ピンポン。

すると、中からぱっと扉が開き、ほのかに甘い香りと共に美羽が顔を出した。

一気に、心臓がぎゅうつと縮んだような感覚が俺を襲う。ひとりで緩む口元を、慌てて引き締めて厳しい表情を作った。

「美羽。先に誰か確認してから開けないと。危ないだろ」

「あつ。ごめんなさい。ちょっと慌ててて…あの。お兄ちゃんには内緒で！」

どうやら、お兄さんにもいつも注意されているらしい。美羽はイタズラが見つかった子供のように、少し小さくなった。

奥のリビングルームからは、カチャカチャと食器の音と、暖かい空気が感じられる。願いは叶わなかったか…でも、来客が俺だって可能性があるので、お兄さんが飛んでこないなんて珍しいな…。

「なあ。美羽…お兄さん、居るの？」

「え？居ませんよ。あつ！お兄ちゃんが帰って来ても本当に言っちゃダメですからね！」

「え？居ないの？でも…明らかに、誰か中に居るよな？」

啓介達…では、ないよな。啓介達だとしても、俺の声を聞いて出てこないわけないし…。

「お客様が来てるんです。ところで、あのう…香月さん？」

中の様子が気になるものの、美羽の問いかけに、意識が美羽に戻る。

「うん？何？」

「そ、その！手に持ってるピンクの箱は…もしかして、カップケーキですか！？」

「うん。手土産だよ。入れてくれる？」

「も、勿論です！ささ。どーぞ！」

なんか餌で釣ったようだけど、すんなり入れたし良しとしよう。こんなに目を輝かせてる美羽を見るのも久しぶりだな。はちきれんばかりの笑顔を見せる美羽につられて、笑顔を返した俺は、次の瞬間固まる事になる。

「スティーブン！！良いお茶請けが手に入ったよぉ！」

す、すていーぶんくく！？

ぴしーん。と固まる俺から箱を奪い取った美羽は、足取りも軽やかにリビングに向かって行く。

「ちょ、美羽！ちょっと待った！」

「え？何ですか？」

「ス、スティーブンって誰？」

「？お客様ですけど」

そうだけど！そうだろうけど！！でもそうじゃなくて！

あからさまに慌ててる様子の俺を、箱を取られるとでも思ったのだろうか。美羽は

両手でしっかりとカップケーキの箱を持ち直し、不思議そうに俺を見上げた。

答えは意外な場所からもたらされた。

「直接聞けばいいだろう」

奥から出てきたのは、日に焼けた肌に明るい茶色の髪の毛の高い男……。

東洋人に見えるが、日本人ではない事は一目で分かる容姿の男だった。

「あんたは？ ナニモン？」

すると、目の前の男は白い八重歯を覗かせて薄く微笑んだ。

「まず、座ったら？ お茶の用意が出来たところだ。言っとくけど、この場の空気を

乱したのは君だ。君の方が乱入者だって事、忘れてないか？ 追い出してもいいけど、

お茶請けに免じて許してあげよう。美羽の好きなお菓子みたいだしね」

落ち着いた声色の流暢な日本語でそう言うと、さっさとソファに腰掛ける。

一気に言われたそれは、悔しいけれどその通りで俺は反論できず、かえって一気に冷静になった。

「美羽。お客様の分の茶器とお皿もご用意して」

「…あんたも『オキヤクサマ』だろ」

「失礼。僕では茶器の場所が分からないし、なにより君の名を僕は

知らないからね。仕方のない事だと思わないか？」

「……かづきしゅう香月柊だ」

「ああ。サークルが一緒だった先輩だね」

なんでだ。美羽が俺のいない場所で俺の話をしていたのは嬉しいのに、相手がコイツなのは嫌だ。そんな複雑な感情が一気に湧きあがった。

そこに、美羽が茶器と皿を持って戻ってきた。

「ええっと……」

「彼が、例の先輩って事を、確認したところまでだよ。僕の自己紹介はこれから」

例のって！？なんだよソレ！

「香月さん。彼は、ステイブン・チョウさん。お兄ちゃんが事故にあった時のお宅の息子さんで、私と一番年が近かったから、すごくお世話になったの」

「よろしく。僕は、君より三歳程上かな？」

穏やかな微笑みで握手を求められるが、暗に年上に対しての礼儀がなっていないと言われているように感じた。

「どうも……その節は、美羽がお世話になりました」

軽く握手して応戦したつもりだったけれど、相手は軽く肩をすくませるだけだった。

「別に？僕が好きでした事だから、サークルの先輩が気にかける事でもないさ」

この反応…やっぱりそうなのか？俺の嫌な予感…不安は当たったりするワケ！？

おまけに、俺の前に小さな茶器を置いた美羽は、そのまま俺の向かい側のソファ…つまりはスティーブンの隣にちょこんと座った。

美羽が座れるように、少し横にずれたのに！！

「なんでそっち座るの」

「え？だって今日はお茶の淹れ方を教わるんだもの」

「ちゃんと淹れられるだろ？」

「あれは見よう見まねで…せっかくだから教えてもらおうと思って約束したんです」

「あー。そ」

「美羽。いいかい？茶葉には直接触れたらいけないから気をつけて。うん、量は

この位で大丈夫だ」

スティーブンはまるで俺なんか居ないかのようにさっさ講義を始めた。

美羽の目が、真剣なものに変わって、優雅な動きで手際よくお茶を

淹れるスティーブンの
動きを追う。

「さあ。真似してやってごらん」

小さな丸い急須を渡された美羽は、ややぎこちない動きでとぼとぼ。
とお湯を注いだ。

途端に、スティーブンの目が優しい色を帯びた。

ものすごく…なんだかものすごく居心地が悪いんですけど！

でも、美羽の真剣な表情を見ると、とてもじゃないけど邪魔なん
て出来ずに、結局

カップケーキを取り分けたりと裏方に徹するしかなかった。

「なかなか上手になった。授業料も1回で済みそうだね」

「土曜日の夜でしょう？分かってるよ！。奮発するから！先生！」

ぴたり。と動きが止まる。

「土曜？用事…あるのか？」

「えっと、バイト終わってからスティーブンにご飯をご馳走するん
です。お茶の

特別授業のお礼ですよ」

「そっか…。俺…土曜日ちょっと誘いたかったんだけど…無理か？」

美羽は、一瞬迷うように瞳を揺らしたが、ふるり。と首を振った。

「ステイブンの誕生日で、お店も予約しちゃったんです。ごめんなさい」

「…いや。いいよ…また、今度な」

なんだか一気に疲れた気がした。正直、今まで予定を聞いてから行動するなんて事もなかった。

女達はいつだって、俺の都合に合わせて動いてくれてた。当然、断られるのだって今回が初めてだ。

だから？だからこんなにショックが大きいのか？

いや…相手が美羽だからだ……。

その美羽は、元気に「はい！また今度、斎賀さん達とご飯行きましょうね！」と

返事をして、今は大きな口を開けてカップケーキを頬張っているところだった。

はぁ……。ほんとにコイツ、俺にこんだけダメージ与えてるって分かってんのかな？

「…そうだな。じゃあ、今日は帰るよ。お兄さん、遅くなるのか？戸締りはちゃんと…」

「大丈夫だよ。僕が確認する」

ケーキを頬張ってちゃんと話せない美羽の代わりに、なぜかステイブンが応えたのがカチンときた。

「…アンタもそろそろ帰ったら？こんな夜に2人きりなんてお兄さんが知ったら…」

「大丈夫だよ。宇海も僕が居る事は知ってる。でも…そうだね。今日は僕も退散しよう。」

意外な人物が現れたおかげで、計画の変更が必要なようだし」

口をモゴモゴさせながら、会話が理解できないとでもいうように首をかしげる美羽の頭に
ぽふん。と一度手を置くとステイブンが立ち上がった。

「あのう…カップケーキ…」

「全部やるよ」

「僕の分もお食べ」

「あ、ありがとう…?」

「じゃあ…また連絡するから」

「土曜日楽しみにしてるよ」

「う、うん?」

慌しく帰る俺たちを、美羽はずっと不思議そうに眺めていた。

カチャリ。

「さて、と」

「つまり、そーゆーコト?」

ドアが閉じられると同時に話し出す。

「そのようだね。まあライバルとしては申し分ないけど？」

「こっちのセリフだったの」

苛立ちを前面に出す俺とは違い、ステイブンは穏やかな微笑みを崩さずにライバル宣言した。もっとも、目は笑ってなかったけど。

「わりーけど、渡す気なんかさらさらないから」

「それは僕もだけどね。ま、お互い頑張ろう。じゃあね」

「おい！どこ行くんだよ！」

「どこって…部屋だけど？ああ。美羽のお隣さんになったんだよ。これって一歩リードかな？じゃあね」

ヤツはにっこりとムカつく笑顔を見せると、美羽の部屋の隣へと消えて行ったのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7837j/>

マシュマロアイス

2011年1月2日14時28分発行